

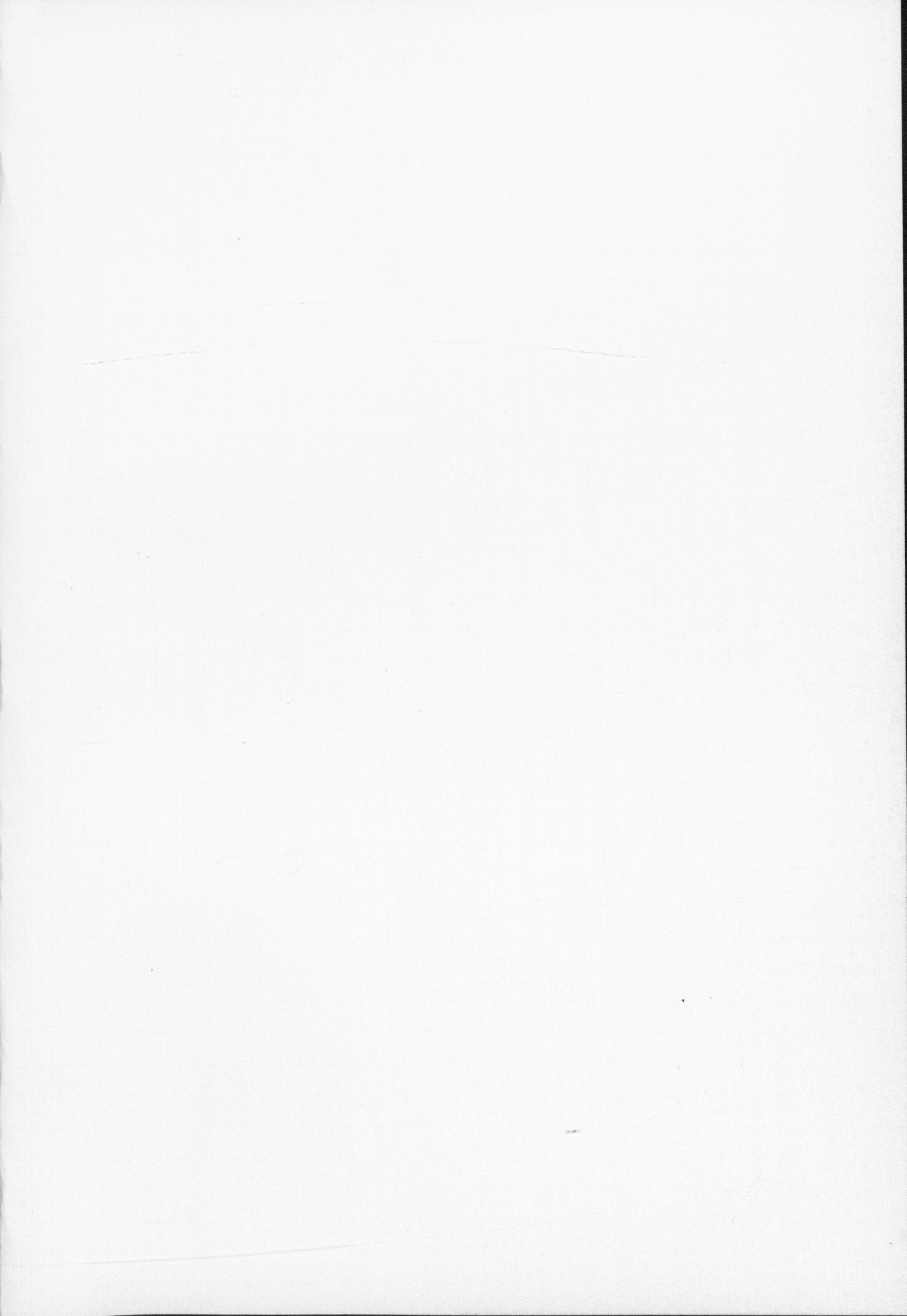
盟連羽灰

脚本集 第八卷

第十二話、第十三話収録



安倍吉俊







灰羽連盟脚本集

第八卷



灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第12話 鈴の実・過ぎ越しの祭・融和

第8稿 (2002.10.21)

▲巻頭のカラーイラストについて。一枚目は描きおろし、二枚目は莉巻に続いて廉価版のDVDボックスのパッケージイラストの別案のラフに加筆して着彩したものです。今回は、線画をトレスアップしつつ、冬服に描き変えました。

○登場人物

ラツカ

ネム

レキ

ヒカリ

カナ

クウ（壁の発する囁き声に混じっています）

話師

オールドホームの灰羽の子供達

ダイ

シヨータ（ガヤのみ）

ハナ（ガヤのみ）

寮母（セリフなし）

ヒヨコ（氷湖、と書かれている時は常にひょうこ、と読みます）

ミドリ

スミカ（セリフなし）

パン屋の店長（セリフなし）

パン屋のおかみさん（セリフなし）

パン屋店員（セリフなし）

時計屋の親方（セリフなし）

カフェのマスター（セリフなし）

古着屋店員（セリフなし）

▲こんな微妙な出演のためにわざわざアフレコをお願いしてしまいました。

●サブタイトル

●オールドホーム、廊下

朝。薄暗い廊下。ラッカとレキ、並んで歩いている。レキの表情をうかがうラッカ。レキ、絵の具で汚れたツナギ。雑に後ろでまとめた髪。軽く生あくびをし、汚れた手で目をこする。

ラッカ「……顔色悪いよ」

レキ「……寝不足かな。でも大丈夫……」

どこかうつろな明るさのレキ。ラッカ、心配顔。レキ、ポケットを探る。あれ、という顔。ラッカ、それに気づいてポケットからライターを出し、レキに差し出す。

ラッカ「そうだ、これ。テーブルに置き忘れてたよ」

レキ「……………（ふっ、と肩の力を抜いて）ラッカにあげる」

ラッカ「えっ？」

レキ「もう必要ないから……………」

すたすたと歩いてゆくレキ。ライターを握りしめたまま、立ち尽くしてしまいうラッカ。

●ゲストルーム

エプロン姿のヒカリ、朝食の後片づけをしている。ストロブの脇でテーブルに頸を載せて背中を丸めているネム。がちやつとドアの開く音。ヒカリ、明るい声で

ヒカリ「おっはよ……………なあに？！その格好」

レキとラッカ、入ってくる。レキ、自分の絵の具だらけのツナギを見る。

ヒカリ「すぐに着替えて、手も洗って。もう」

レキ「やれやれ、最近ヒカリ、すっかりしてきたなあ」

レキ、小言を言うヒカリから退散するように洗面所に姿を消す。席を立ち、レキのカップにお茶を注いでいるネム（さりげない気遣いが伝わるとよいです）。洗面所の

▲久しぶりにこの髪形……と思ったのですが、本編ではおろしていた。どうしてだったか憶えていない。ツナギは設定する時間がなく、おまかせにしたか、写真を探して指定した。子供時代のツナギの設定画があるから大丈夫、というような話だったと思う。

▲ネムの心配りがさりげなく見えるようなシーンをいろいろつくったのですが、僕が規定の枚数に収められなくて、かなりカットせざるを得なくなりました。さりげないシーンだけに、射るシーンの候補に上がりやすく、ネムはちょっとわりを食いました

レキに向かつて

ネム「今日、鈴の実際の市が立つ日よ。忘れてないわよね」

レキ「（顔を洗っているらしき水音）……………あ……………」

ネム「（溜息）これだもの」

ラッカ「ずずのみ……………つて？」

ヒカリ、エプロンを脱ぎウキウキとマントを羽織つてい
るところ。

ヒカリ「過ぎ越しのお祭りに必要なの。早く行かなきゃ、いい実が

なくなっちゃう」

レキ「（洗面所から）私はいいや。起き抜けで（あくび）……………」

ラッカ、洗面所の前へ。ドアは開いていて、洗面台の前
の、だるそうなレキが見える。

ラッカ「（励ますために元気に）レキ、行こうよ。外に出れば目も
覚めるよ」

●オールドホーム南棟前

南棟。ふかふかの新雪が積もった中庭。玄関前では、カ
ナと子供達が雪だるまを作っている。オールドホームの
灰羽達の姿を模したもの（子供達と寮母も含む）。

ネム「カナ、行くわよ」

玄関から出てきたヒカリとネム。

カナ「うーい」

ヒカリ「わあ」

南棟の前にずらつと並んだ雪だるまを見て、駆け寄るラッ
カ。カナらしき雪だるまに角が生えているのを見て、く
すくす笑うヒカリ。むっとして子供達を睨むカナ。一番
大きなレキの雪だるま。マフラーが巻かれていたりして、
ちよつと手が込んでいる。レキ、ラッカに背を押されて
遅れてやって来る。あくび。

ラッカ「レキ、ホラ、早く！」

レキの姿を見つけ、子供たちがわらわらと駆け出てくる。
うれしそうなシヨータ。ハナ、レキの手にぶら下がるよ
うにしがみつく。レキ、ちよつと戸惑うが、自然と笑顔

▲ヒカリのマントも、スリットが入っていて手が出せるデザインが気に入っていたので、
なるべく出したかったけど、ここでは入らなかつた（このあとの街のシーンでちゃんとマ
ントの構造が分かる絵があるのていいのですが）。続く雪だるまのシーンも、初稿に比べ
て大幅に削ったにも関わらず入り切らなかつた。エピソードも、このあたり、コンテマン
の方にだいぶ面倒をかけてしまった気がします。

●街、大通り市場

が浮かぶ。それを見て、ほっとした様子のラッカ。

大門に続く大通りの市場。鈴の実の市が開かれている。色も形もさまざまな鈴の実が売られている。色はくすんだ赤が多いが、ときどき緑、黄、白、茶などの色が混じった物もある。形は、寺院で腕に付ける鳴子に近い。実だけが単体で売られているものもあり、リボンのような布や太い紐を輪にしてヘタに糸で括っているものもある（寺院の鳴子のように）。慌ただしく、浮き立った雰囲気。街の人たちも繰り出して、市はにぎわっている。

ラッカ「これ……みんな同じ木の実なの？」

ネム「そう。土に鉄や緑青を混ぜると色が変わるんだって」

ヒカリ「殻が厚くて、振ると硬い音がするのがいい実なのよ」

ラッカ、手近にあった赤い実を振ってみる。中に種があるらしく、から、ころ、と音が鳴る。

ヒカリ「それはありがとうの実。お世話になつた人にあげるの」

ヒカリ達、子供たちを連れ、それぞれ自分の鈴の実を探しながら人込みに紛れて離れてゆく。ラッカは立ち止まつたまま、目を閉じ、からころと鈴の実の音色に聴き入る。

レキ「楽しそうだね」

目を開けるラッカ。すぐ隣にしゃがんでいるレキ。ラッカを真似て、耳元で鈴の実を振っている。レキはもういくつか鈴の実を買つたらしく、手に袋を下げています。

ラッカ「気持ちのいい音……」

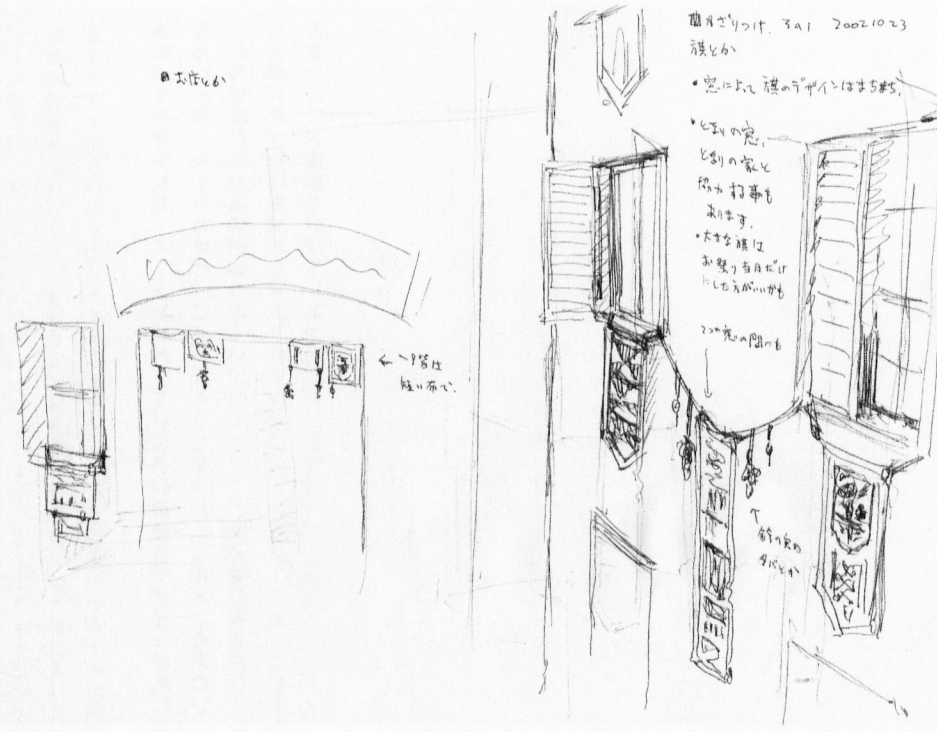
レキ「うん」

ラッカ「これは、感謝を表すものなの？」

レキ「色によって違うんだ。感謝とかお詫びとか……。身近な人にこれを贈って一年の区切りをつけるならわし……」

ラッカ「へえ……」

さざ波のような雑踏。身を屈めて路面に並べられた鈴の実を眺めるレキと、傍らに佇むラッカ。突然、雰囲気壊すようながなり声



▲実際の植物でも、土の鉄分量などで花の色が変わったりするらしい。

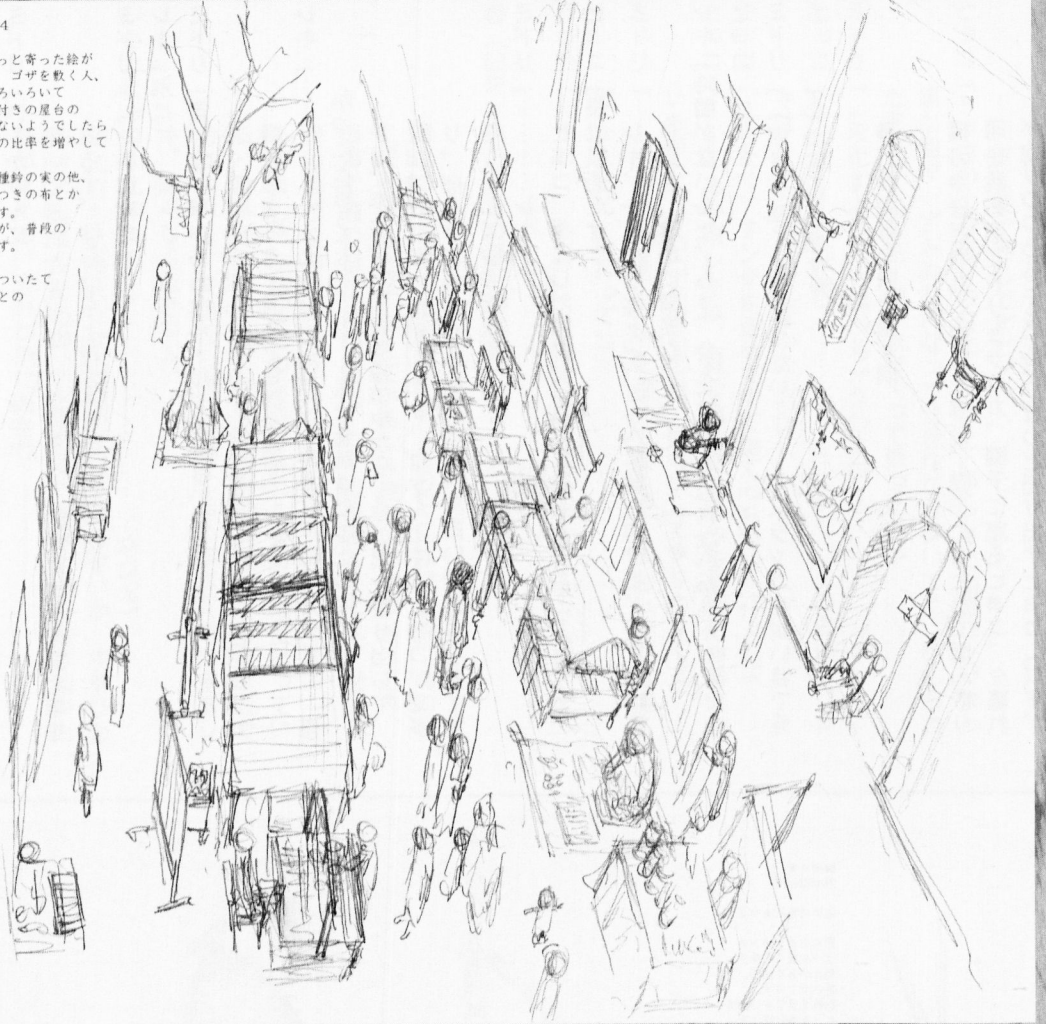
■祭りの日の街並みの設定画。隣と協力して旗を出すというのは、隣同士のいさかいを年をまたいで持ち越さないようにという風習から。でもかえってケンカの種にもなりそうなの……。

■市場風景 20021024

こんな感じ。もうちょっと寄った絵が
ありますね。市自体は、ゴザを敷く人、
屋台を持ち込む人、いろいろいて
いいと思います。屋根付きの屋台の
方が、作画の負担が少ないようでしたら
適度に屋根付きの屋台の比率を増やして
ください。

売っているものは、各種鈴の実の他、
祭の飾りに使う、模様つきの布とか
装飾品、花などが主です。
英を描いていないですが、普通の
市より規模は大きいです。

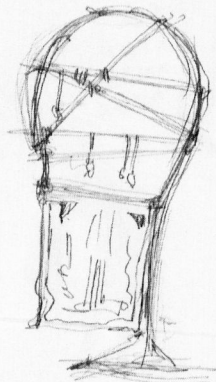
各屋台の後ろは、布をついたて
のように立てて、歩道との
仕切りになっています。



■街並み 20021024

お店の店頭などに
よくおつかひです。
長い杖をたおして
みも固定した物で
下に布を下げて。

この下には、
お客さんとか
通行人が
鈴の実を
下げることができます



■街並み。これも、
フランスのコンベン
ションに行った時の
市の風景を参考にし
た。群衆が多くて大
変なシーンだったが
、このあたりの背景
や通行人はみなしつ
かり描かれていてど
ても良かった。

ミドリ「なんでいつつも団体行動がとれないのよ！」
ヒヨコ「うっせえな。付いてくんなよ」

慌てて立ち上がるレキ。人並みを肩で押しのけるようにして、ヒヨコが顔を出す。出し抜けにレキと顔を突き合わせる形になり、唾然とするヒヨコ。

ミドリ「いーかげんに……………！レキ」

続いて現れたミドリ、レキを見て、振り上げていた拳をおろす。はらはらと行方を見守るラツカ。

ミドリ「(レキに向かって)……………なによ」

レキ「別に」

ミドリ「言いたい事があるなら、はっきり言いなさいよ」

あくまで喧嘩腰のミドリ。レキはその挑発には乗らず、軽く息を吐き、淡々と言葉を返す。

レキ「……………私一人の問題のために、みんなに迷惑をかけて、悪

かったと思うよ。……………私は余所者だったのに」

レキ、手に持っていた袋の中から、白い実を取り出して、ヒヨコとミドリに差し出す。ぽかんとするヒヨコ。ミドリ、ぼとりと手のひらに落とされた白い鈴の実を見て驚き、そしてレキを見返す。

ミドリ「……………レキ？」

ヒヨコ、手にした鈴の実を雑な仕草でからからと振って

ヒヨコ「祭は来週だぜ」

レキ、それには答えず、二人に背を向ける。去り際に振り返り、静かに微笑む。

レキ「時間がないんだ。もう、会えないかもしれないから」

ヒヨコ「はあ？」

ミドリ「(俯き、呟く) 時間がない……………？ (ラツカを鋭い目で見つめて) どういう事？」

●工場地区と街を繋ぐ橋

橋の中ほどの丸く膨れた部分。欄干にもたれてほんやり河を眺めるミドリとラツカ。欄干に座るヒヨコ。夕暮れが迫りつつある午後。ぼつぼつと語り出すヒヨコ(以下、

■鈴の実
20021022

色は何色もあります。

質感はギンナンのような固くて多少厚みのある殻で、硬い感じですが、乾燥させて中にあるビー玉大の種子を鈴のようにからから鳴らします。

下部、乾燥して少し割れています。



■鈴の実、設定。右はボツ案。こんな実ひとつでこんなに迷わなくても……………。数年前、ファンの方から実物の鈴の実を頂いたのですが、びっくりするほど良くできていました。今も仕事机のスタンドの支柱にぶら下げてあります。

ヒヨコとミドリの対話のようですが、間にいるラッカに
向けて話す感じです。

ヒヨコ「5年前の土砂降りの日に……ここでレキに出会った。まっ
黒な羽で、ずぶぬれになって泣きながら歩いてた。捨てられ
た猫みてーでさ、助けなきゃって思った」

ミドリ「(茶化すように) 笑っちゃうわよねー」

ヒヨコ「るせえ!! (赤面) ……とにかく、その日から、レ
キはうちの仲間になったんだ」

ミドリ「(冷たく) アンタを連れてすぐ出てっちゃったけどね」

ヒヨコ「……あの頃レキは、壁の向こうに行っちゃまった仲間に会
いたがって、いつも泣いてた。何とかしてやりたくてさ」

ミドリ「……このバカは、レキを連れて壁を登ろうとしたの。壁に
楔(くさび)を打ってね」

ラッカ「!!」

●(回想) 東の農地の壁、基底部

降りつける雨。雷鳴轟く空。その下には壁と森。森の木
に背を押しつけ、震えている14歳のレキ。へたり込み、
恐怖で歯の根が合わない。レキの視線の先には、壁から
跳ね飛ばされたらしく、12歳のヒヨコ(帽子もリュッ
クも無し)が地面に叩きつけられた姿勢で横たわってい
る。右手に内出血のような紫の斑紋が現れ、口元は血で
汚れている。突然苦しげに痙攣するヒヨコ。駆け寄るレ
キ。弱々しく泣き叫ぶ。

レキ「ヒヨコ!!ヒヨコ!!……!!」

壁に打ち込まれた鉄の楔が、強い雨のせい、ずるりと
抜け落ちる。その周辺の壁には、僅かに血の飛び散った
跡が見える。それが雨に流され……

●工場地区と街を繋ぐ橋(回想終わり。やや夕暮に)

ミドリ「……氷湖はもう助からないと思った。なのにレキは傷ひ
とつなくて……それが許せなかった」

▲このあたりは、同人誌で少しフォローしてきた。

ヒヨコ「レキのせいじゃない。俺が決めて俺がやった事だ」

ミドリ「(レキをかばうヒヨコを睨み、むくれて)……………とにかく、勝手なのよ、レキは」

ヒヨコ「一番レキになつてたくせに」

ミドリ「うっさいわね！(ラッカに向けて)……………で、どうしたいって？」

ラッカ「レキの力になりたいの。無事に祝福を受けられるように」

ミドリ「余計なおせっかいはよ。……………レキは人に助けを求めるタチじゃない」

ラッカ「違う！みんな気づかないだけ。レキは、つらくても笑顔でいるから……………」

何か思い当たるらしく、唇を噛むミドリ。ヒヨコ、レキにもらった白い鈴の実をぼん、と放り、手で受ける。

ヒヨコ「やってやるよ。こいつの返事をしなきゃなんねーし」

ラッカ、ぱつと明るい顔。

ミドリ「ヒヨコ。南地区へは入れないのよ。分かってる？」

ヒヨコ「規則は破らねー。(頭を指でつつき、自信の笑み)頭を使うんだよ。頭を」

ミドリ「(露骨に不信顔)……………アンタが？」

●ゲストルーム、キッチン

朝。ボールや計量カップ、金型、卵、小麦粉、砂糖など、散らかったキッチン。オープンに灯がともっている。

ヒカリ「よおーいしょっと」

お菓子作りの準備に余念のないヒカリとネム。のれんから顔を出すラッカ。

ラッカ「おはよう。どうしたの？これ」

ヒカリ「ホラ、こないだの市でさ、廃工場の女の子達と会って、またお菓子の交換会しようって」

ラッカの背後からカナも顔を出す。

カナ「お菓子大戦勃発か」

ヒカリ「お祭りお祭り。ラッカ、レキは？」

ラッカ、ヒカリの手伝いに入りながら、首を横に振る。

▲このあたりから、自分なりにラッカに行動を起こさせようとしたのだけど、結果的に、ラッカは何かをしなれば、と思いつつ、実際には何もできずにいる。初稿では特にそれが顕著で、監督から、『ラッカが言葉だけで何もしていない』と指摘されるまで、自分でははっきりと意識できずにいた。

2稿以降は、尺を詰めつつ、ラッカに行動させるための試行錯誤が続いた。

▲最初にコンテを見た時、ここは演技が過剰ではないかと思ひ、話し合ったが、逆に僕がラッカをおとなくさせすぎていたのだと気付いた。ここまでは基本的なラッカは周囲から与えられるものに反応する形で成長してきたが、ここからは自分で行動を起こさなければ状況を突える事はできない。ラッカ自身がその事を自覚し始めた事を示すためにも、ここは強い演技が必要だった。

ヒカリ、ちよつと残念そうに

ヒカリ「いい気晴らしになると思ったのにな」

カナ「渋い顔してるもんな、最近」

ラッカ「……………どうすればいいんだろう」

ネム「自分にできる事をすればいいのよ。(やや達観した印象。ラッカにだけ聞こえるように) あとは……………レキを信じましょう」

ラッカ、微笑み、頷く。

●レキの部屋

薄暗い室内。椅子に座っているレキ。雪鱗木の薬瓶を机の上にことんと置く。傍らに、クラモリの絵が立て掛けられている。レキの背中の羽は薄めた血のように濡れ、その上からでもはつきりわかるほど黒く変色している羽もある。床に、赤い水滴がぼつ、ぼつ、と滴る。

レキ「巣立ちの日が来なければ、羽を失い、みんなの記憶から、消

える……………」

眩くレキ。クラモリの絵に指先でそつと触れる。

7

●壁の中

防護服のラッカ。11話の、光箔の大量に付着した札の前。ラッカ、札に書かれた文字をぼんやり見ている。

ラッカ(モノローグ)『レキのために、私にできる事……………』

一瞬、囁き笑うような声を聞き、はつと何かに気づくラッカ。かすかにクウの声が混じったように思う。札の文字を凝視し、ゆっくりと手の指を折り、書かれた文字の形を真似るラッカ。

●寺院中庭、四阿(あずまや)

夕暮れ。薄暗い庭園。四阿に座り、手紙を書いている話師。しゃん、という鳴子の音。顔を上げるとラッカが四阿の前に立っている。話師、何か言おうと向き直り、静

▲雪鱗木、は罪憑きの羽を隠すための薬の原材料。樹の種類や、具体的な製法は、7話で語るはずだったが入らず、この名称も本編中には出てこない。

▲これは、レキが、話師との対話などの中から推察した事。

▲ラッカに「クウ……？」というようなセリフを言わせようかとも思ったが、やめた。

▲四阿は、最初誰も読めずにはいたらしい。僕も漢字の交換で出たので使っただけ。正確には『四阿』と書くのは、四本の柱だけで壁のない小屋、と言う意味らしいので、これは四阿ではないのかも。

▲手紙を書く、とあるが別に何かの伏線ではない。前の話数と似てしまっそうなので、変化をつけたかっただけ。

かに話師を見ているラッカに気づく。ラッカ、ゆっくりと両手をあげ、札に書かれた文字を示す。驚く話師。

話師「それをどこで……………？（やや狼狽して）……………話しなさい。許可する」

ラッカ「……………今の文字、クウって読むんじゃないですか？」

話師「……………だとしたら？」

ラッカ「巢立った灰羽の札が光箔を生み、そしてその光箔が、次の光輪の元になる……………。壁は知っているんですか？巢立ってゆく灰羽の事を！」

話師「……………それを聞いてどうする？」

ラッカ「もし、レキの札を見つければ……………」

話師「それはできません。確かにその札はクウという名の灰羽のものだ。

だが、それはお前達がつけた空（ソラ）という文字ではない。

同じ響きを持つもうひとつの名前だ」

ラッカ「……………もうひとつの、名前？」

話師「灰羽が生まれると、繭の夢から得た最初の名を、壁の札に記す。やがてその者が灰羽として定まると、札は真の名へと書き換えられる。姿なき者の手によって……………」

ラッカ「姿なき者……………。あの、囁くような声ですか？」

話師「お前を呼ぶ者が……………？（黙考）……………そうか。奇妙な巡り合わせだが、今が良い機会という事なのかもしれん」

話師、四阿の引き出しから、紋様の入った木の箱を取りだし、立ち上がるとラッカに手渡す。上蓋をスライドさせる。中に壁の札のミニチュアのような札が入っている。札には『絡果』と書かれている。壁の中の札とは違い、読める漢字。

話師「それは壁の札を模して我々が作った物だ」

ラッカ「らっか……………」

話師「その名の由来が分かるか」

ラッカ「（沈んだ声で）……………私が、木の実のように殻に閉じこもっていたから……………」

話師「（厳しいが、優しいさも少し）そして、この地で芽吹き、根を張り、自分の力で他者との繋がりを得たからだ。故にそれが

お前の真の名となる」

▲このあたりの会話は、テンボよく情報を伝えるためにかなり試行錯誤した。長い会話を細切れにしてバズルのようにはめていった。思い出しても頭がこんがらがる。でもいい勉強になった。

▲これは設定画を描いた記憶がうっすらとあるのだが、絵が見つからなかった。言葉で指示したのかもしれない。

ラッカ「(はつとして)レキ。レキの本当の名前は……………」
 話師「レキは、己の真の名を知らない。レキは私を憎み、何も聞こ
 うとしない……………」

ラッカ「何故？」

話師「……………5年ほど前、レキは病にかかった灰羽の少年を連れ
 てきた」

ラッカ「知ってます。二人で壁を登ろうとしたって」

話師「そうだ。少年はレキを巻き込むまいと医者に行く事を拒んだ。

レキはかくまってくれと言ったが、壁を傷つけるのは重大な
 犯罪だ。私は自警団を呼び、レキは裁かれた。その罪人とい
 う烙印が、レキを罪の輪に閉じこめてしまった……………」

ラッカ「レキは、ずっと自分を責めています。黒い羽も、怖い夢も、
 みんな自分の罪のせいだって……………どうしてレキだけ赦さ
 れないんですか……………」

話師「お前は何故赦されたと思う？」

ラッカ「私は……………分かりません。私は、自分を赦した訳じゃ……………
 ………………」

話師「誰も、自分で自分を赦す事はできない。だが、お前には鳥が
 いた。お前を信じ、寄り添う者が」

ラッカ「……………(呟くように) 罪を知る者に罪は無い。ひとりでは
 同じ場所を回り続けてしまうけど、(だんだんはつきりと)
 ………………」

でも、もし隣に誰かがいるならば……………」

話師「……………おそらく、それが罪の輪から抜け出す鍵だ」

ラッカ、はつと顔を上げる。話師、もうひとつ木箱を差
 し出す。ラッカのものより、ずっと古びた木箱。

話師「祭の後で、レキに渡しなさい。つらい役目になるだろうが、
 レキにとって、お前が最後の希望なのだ」

ラッカ、恐る恐る木箱を受け取る。話師、手にした杖で、
 たん、と地面を打つ。

話師「ゆけ！(怒鳴るのではなく静かに鋭く)」

ラッカ、凛々しく顔を上げ、話師に一礼し、はじかれた
 ように駆け出す。

●オールドホームへの道

▲この経緯は、回想を入れてわりとしっかり書いたのだが、とても入り切らなかつた。一番長いバージョンでは門番も出てくる予定だったのだが、今回も出番がつかれなかつた。残念。

陽は落ち、月が浅く昇っている。除雪の甘い雪道を、さくさくと音を立ててラッカは駆けてゆく。暗い地平の向こうには、オールドホームの影があり、かすかに明かりが見える。たったひとつの、暖かな光。ラッカはレキの名札の入った木箱を両手に包み、胸に押し当てる。

ラッカ「レキの名前……本当の名前。過ぎ越しの祭が終わったら……これを……」

●ゲストルーム、朝

テーブルで、並べたケーキの材料を前に（レモンスフレなので丸のレモンがいくつかあります）、話し込んでいるヒカリとレキ。ラッカ、ドアを開けて入ってくる。レキを見て

ラッカ「……おはよう」

ラッカ、無意識に木箱の入った上着のポケットを押さえる。

レキ「おはよう。（ヒカリを見て）うん、これでいい」

ヒカリ「レキが手伝ってくれたら百人力ね」

腕まくりしてキッチンに消えるヒカリ。

レキ「早くキッチン開けてくれないと、晚餐の支度が出来ないよ」

ヒカリ「（のれんの向こうから）分かってます」

レキ、ベランダに出る。後に続くラッカ。珍しく晴れた空。風は身を切るほど冷たい。

レキ「過ぎ越しの祭り、か……」

ラッカ「……」

レキ「ラッカ。……私は、今日は街には行かない」

ラッカ「レキ？」

レキ「我儘言ってごめん。でも、今日は、今日だけはここに居たいんだ。ここで暮らした事を、決して忘れないように……」

ラッカ「……うん」

ベランダから外を見る二人。

ラッカ「……初めてここから外を見た時ね」

▲ここには書かれていませんが、アフレコの時は具体的に話している事を決めなければいけなかったの、お菓子作りの本とかサイトをあさって、それらしいセリフを考えました。自分に知識がない事をそれらしく書くのはなんか冷や汗が出ます。

レキ「ん？」

ラッカ「知らない世界に来たんだって、ちょっと怖かった。……

……でも今はここが私の一番安心できる場所。……ここに

は、いつもレキがいるから」

レキ「(ちよっと照れくさそうに) ありがとう。……もし、私

の事を忘れても、この部屋の事は忘れないで欲しい」

ラッカ「忘れないよ。忘れられるわけじゃない。……だって、レキと居た時間が、私の思い出のすべてなんだから――

――」

遠くを見つめるラッカ。泣くまいと、手すりに置いた手を硬く握る。

●街へ続く道

陽は落ち、浅く月が出ている。寺院とオールドホームと街をつなぐ三差路の橋から街を見下ろすと、ぱん、ぱん、と煙だけの祝砲のような火花が上がっている。レキを除く一同と子供たち、白い息を吐きながら街へと下ってゆく。左手には、輪にした紐を結んだ鈴の実をたくさん下げている。ヒカリは大きなスフレの箱を持っている。

●街中

賑わう街の中。

ラッカ「賑やかだね」

カナ「最初の鐘が鳴りだしたら静かになるよ。過ぎ越しの時は静かに過すものだから」

ラッカ「そうなの？」

ヒカリ「(鈴の実をしゃら、と鳴らして) そのためにこれがあるのよ。言葉ではなく気持ちを伝えるために」

カナ「で、鐘の音が変わって、最後に……」

ラッカ「最後に？」

ヒカリ「お楽しみ。言葉じゃ説明できないもの」

ガラーン、と時計台の最初の鐘の音。騒々しくない程度

▲このあたり、セリフがちよっと感傷的になりすぎているかなあ……と今読み返すと思う。書いていた時は、キャラクターに感情移入しすぎていたのかもしれない。

の間隔で鳴り続ける。いたずらっぽく人さし指を口にあってて笑い合う一同。

●街中、寮母の家（以下、祭のシーンは一枚絵＋１アクション程度になると思われますので、絵として使われるシーンを箇条書きにします）

（一枚絵）大きな民家の玄関を開けた寮母に灰羽の子供たちが、わつと寮母に赤い鈴の実を差し出す。

（アクション）はしゃぐ子供たちにやれやれといった顔の寮母。笑うラツカ達。

●パン屋

（一枚絵）パン屋の親父とおかみさんに赤い鈴の実を渡すヒカリ。

はちきれんばかりの笑顔の親父。

（アクション）さりげなくカニ歩きで近寄ってきている若い店員。

●スミカの家

（一枚絵）雪が降っている。スミカの家を訪ねるネムとラツカ。赤

ん坊を抱きかかえているスミカが窓から顔を出し、二人に赤ん坊を見せている。

（アクション）紅葉のような小さな手で、鈴の実を揺する赤ん坊。

顔を見合わせ、笑い合う３人。突然、赤ん坊が鈴の実を口に持っていき、慌てるスミカ。

●オールドホーム

（一枚絵）ゲストルームのテーブル。沢山の料理が並べられている。

（一枚絵）遠くで鐘が聞こえている。部屋に佇むレキ。

●古着屋

▲初稿でカ一杯書いてしまい、どうにも収まらなくて、泣く泣くこの形にした。この話数が8稿までかかってしまったのは、ほとんど長さの問題で、それだけ削らざるを得ないシーンが多く、心残りもあるのだが、知恵を絞って削ったぶん、密度の濃いものになったとも思う。

(一枚絵) 店頭の小物を片づけている古着屋。隣に赤い鈴の実を差し出しているラッカ。『俺に?』という仕草で、自分を指さす古着屋。

(一枚絵) パンあり) ラッカ、ちよつと片足を前に出し、スカートの裾をちよつと持ち上げ、ブーツを見せる。
(アクション) 古着屋、にっこり笑いウィンク。

●カフェ

(一枚絵) カウンター前の天井に、ずらつと赤い鈴の実が下げられている。お客に配るものらしく、店の名前の入った特徴的なリボン。カウンター前のマスター、目の前に立つラッカに『よお』といった表情を浮かべている。

(アクション) ラッカ、店の鈴の実を右手に提げて駆け去り、戸口でくるりと振り向いて、大きくべこんとお辞儀をする。いつかのクウの仕草に少し似ている。

(一枚絵) カウンター前。それをちよつと懐かしそうな、眩しそうな目で見送るマスター。

13

●時計台

(一枚絵) 広場から見た時計台。鳴り続ける鐘。

(一枚絵) 機械室の階段の手すりに腰掛けている親方の後姿。背中に回した前掛けの紐に、いつの間にか鈴の実が結ばれている。

(アクション) 親方の背後の階段。足音を忍ばせて降りてゆくカナの後ろ姿。くるっと階上を振り返り、いたずらっぽく笑う。

●廃工場 (前の一連のシーンと繋がりをもちつつ通常動画へ)

夜の廃工場。黒い威圧的なシルエツト。門は閉まっっている。ラッカ、ちよつと怯むが決心した表情で扉を叩こうと手を上げる。その途端

ミドリ「(からかい口調) ホント、おせっかいねえ」

はっとするラッカ。金網の抜け道の前に、ミドリとタイ。

▲古着屋がこんなに印象に残るキャラクターになるとは思わなかった。余談だが、アニメは動かさなければならぬので、無精ヒゲのようなものの処理は結構難しいみたいで、話数によって、ヒゲの感じが若干違う。

▲これまたどうでもいい話だけど、この、金網の抜け穴のシーンを書くたびに、子供の頃に読んだ赤川次郎の小説のワンシーンを思い出す。どんな小説だったか全然憶えていないのだけど、金網に穴があって、それを抜けてどこかに行くシーンだけが、どういふわけか記憶に残っている。

ダイはマフラーと帽子をつけて、リボンのついた大きな箱を持っている。

ダイ「ラッカ！（自慢気に箱を見せて）へへ、ケーキ」

ラッカ「……………（ダイの頭を撫で、ミドリに向き直り）おせっかいなのは分かってます。でも……………」

ミドリ「いいよ、そのおかげでこっちもレキにひとこと言ってる気になったんだから」

ラッカ「え？だけど……………」

ミドリ「（いたずらっぽい笑い）ウチにはウチのやり方があるのよ。」

お上品なアンタ達とは違ってね」

ダイ「ミドリは品がないもんなあ」

ミドリの蹴りが飛ぶ。素早く避け、舌を出すダイ。ミドリ、咳払いして気を取り直し、腕時計をちらっと見せる。

ミドリ「……………そんな訳で、過ぎ越しのびつたり5分前に余興があるの。レキは街に来てるんでしょ？」

ラッカ「ううん……………。今日はオールドホームに残るって」

ミドリ、ぎよっとする。

ミドリ「なんで！？お祭りなのに！」

不意に、鐘の音が変わる。ミドリ、遠い時計台を見て

ミドリ「鐘の音が……………！もう、時間がないじゃない！」

ミドリ、駆け出す。驚き、慌てて後を追うラッカ。

ラッカ「待って！どうしたの？！」

ミドリ「アンタに頼まれた事をするの！」

●街外れの坂道

舗装された道が終わり、暗いあぜ道の緩いのほり道。ラッカ、雪に足を取られ、転ぶ。先をゆくミドリ、舌打ちし、引き返して来る。完全に息が上がっているラッカ。

ミドリ「お上品に走ってるからよ。……………（ミドリも荒い息）休む？」

ラッカ「（首を振り）平気。私が頼んだ事だもの！」

ミドリ、弱音を吐かないラッカをちよっと見直す。

ミドリ「（ラッカに手を貸し）そうだね。レキには時間がないんだから……………」

▲すっかり馴染んでいる。

ラッカ「えっ？」

ミドリ、腕を上げ、レキにもらった白い実を掲げ

ミドリ「普通は、白い実はお詫びのしるし。でも、街を出る事にした人が使う時は、さよならって意味になるの」

ラッカ「……………」

ミドリ「行くよ。こつちも時間がないんだから！」

頷くラッカ。二人、駆け出す。

●オールドホーム

アーチを抜けて駆けてゆく二人。息が上がっている。中庭に出る。

ミドリ「(腕時計を見て)あと一分!!レキの部屋は？」

ラッカ「西棟の3階！」

ミドリ「(3階を見上げ)……間に合わない!(悲痛な叫び)レキ!!

!!会いに来たのよ!窓を開けて!!

叫びは鐘の音に紛れてしまう。悔しがり、それでも玄関に駆けてゆくとするミドリ。

ラッカ「待って!!」

振り返るミドリ。ラッカ、近くにあったレンガを拾い上げ、レキの部屋の真下の壁に向かって走る。

ラッカ「……………レキっ!!」

ラッカ、壁の雨どいに、体ごとぶちあたるようにしてレンガをぶつける。ごわあんとものすごい振動が上へと伝わり、付近の窓のガラスがびりびりと震える。屋根の雪が落ちる。

ミドリ「……………やるっ」

レキの部屋からガタツと音がして、雨戸ごと勢いよく窓が開かれ、レキが顔を出す。

レキ「(階下を見て)!!ミドリ!!?どうして……………」

ミドリ「説明は後!廃工場を見て!!」

レキ「?」

一同、街の方角を見る。廃工場のあると思われる辺りにはぱつと閃光が走り、続いて、黄色い火花が空一面にわた

▲ちょっと分かりづらかっただろうか。

▲これは、雨どいの配管が伝声管のように音を伝えている、という描写なのだが、絵では分かりづらいかな、と思い、屋根の雪が落ちる描写を足した。
初稿では、これはミドリがやっていて、そのあたりも、ラッカが行動していない、といわれる原因になっていた。

と広がる。そしてどんっ、という音（距離の分、音が遅れるというニュアンスです）。呆気にとられるレキとラツカ。ミドリ、レキを見上げ

ミドリ「……これが答えよ。氷湖と……私のね」

レキ「……やれやれ」

ミドリ「（笑い）氷湖に返事があるなら聞くわよ」

レキ「……返事はもう……渡してあるよ」

ミドリ「……そっか。（花火を見て、小声で）振られてやんの」

レキ「……あんた達を見てると、悩むのが莫迦らしくなるよ」

●レキの部屋

レキ「……（前のセリフと繋がってます）ホント」

レキ、窓枠にもたれ、遠い目で花火を見つめる。呆れながらも自然と笑みがこぼれる。屈託のない、笑顔。

●オールドホーム、西棟前

ミドリ「あー疲れた」

レキの部屋の階下。どっと壁にもたれるミドリ。ずるずるとしゃがみ込み、膝に乗せた手のひらに顔をうずめる。

ラツカ、左手の鈴の実の束から、黄色の実を見つけ

ラツカ「黄色……黄色の実ってどんな意味……？」

ラツカ、ミドリに声を掛けようとするが、ミドリが肩を震わせ、声を殺して泣いているのに気づく。ラツカ、静かにあどずさる。アーチに向かって歩き、途中で振り返ると、一階に降りてきたレキが、ミドリに声を掛けるのが見える。優しく微笑むラツカ。

●オールドホーム、正門アーチ前

アーチを抜けるラツカ。ちょうどカナ、ネム、ヒカリと、大きなケーキの箱を頭の上に抱えたダイが歩いてくる。後ろには年小組の子供達もいる。

▲鈴の実の色ごとの意味やここでのやりとりの具体的な意味については、ほかして描いたり、花火やレモンのスフレなど、鈴の実以外の物も道具として使われたりしたので、分かりづらかったかと思っただが、考察系のサイトなどを見ると、わりとちゃんと伝わって来たようだった。

ヒカリ「ラッカ、早かったね。見た？あれ」
カナ「それよりコレ見てよ。じゃーん」

カナ、両手にワインの瓶を持って見せびらかす。

ネム「レキは？」

ラーチの向こうを覗こうとするネム達を止めるラッカ。

ラッカ「あと少しだけここに居て」

ネム「なあに？」

ラッカ「いいから」

鐘の音が止む。

カナ「……………鐘が止んだ。今年も終わりかあ」

ラッカ「そうだ。最後に何が起きるの？」

ヒカリ「（ふふっと笑い）……………街の壁が、この一年受け止めてきたすべての人の想いを、空に還すの」

ラッカ「想い……………？」

ネム「耳を澄ませて」

一同、静かに耳を澄ませます。静寂。そして不意に、街中の

壁から、かすかな水音と子供の囁くような声が沸き起こ

り始める。まるで子供たちが列をなして囁き、笑い合い

ながら行進していくかのように壁全体、街全体をさざ波

のような幸福な笑い声で包み……………。

ラッカ「！」

すべての音が、ふわりと空に舞い、天空へと消える。一

同、寺院での挨拶のように、両手を軽く前に出し、手に

下げられた鈴の実を軽く揺する。街中から、鈴の実の揺

れる気持ちの良い音が響き、それも空に吸い込まれると、

月明かりに照らされたグリの街に、本当の静寂が訪れた。

原稿用紙200字詰め2枚

▲僕は、ここで頭を浮かんでいた情景をそのまま文章にしていたのだが、今見返すと、『音がふわりと宙に舞い……………』というような事を書いている。どうやって絵にしたらいんだ！とつっこまれそうだが、この場面も、この文章だけが手がかりに、まさに思った通りの絵になっていた。

▲この話数で、外面的には物語は一応幕を閉じる。ただ、レキの心の闇だけを残して……………。

この話数で、まるで最終話のような締めくくり方をしてしまって、はたして最終話の面白い展開に観る側が憑いてきてくれるか、不安はあった。でも、この形が今自分に書ける最良のものだという確信の方がまさっていたので、迷う事はなかった。まあ、何よりも時間がなかったというのが本当のところだったりもするのである。

この話数は、初稿ではやはり長すぎてまったく30分に収まらず、5話ほどではないものの、大幅な刈り込みが必要になった。しかし、絶対に書かなければならない事はあるていど決まっているので、それほど大幅な削除はできず、しかも、ある程度ゆったりとした間がないと雰囲気が出せないという事もあり、作業は難航を極めた。

ファミコン時代のゲームで、少ないロムにゲームを収めるため、使用メモリをバイトでも削りたくて、キャラクターやモンスターの名前すら短い単語に変えた、などという話を聞いたが、まさにそんな感じだった。

ずっと家にもって執筆の毎日だったが、V編の立ちあいなどでスタッフに会うと、みんな別人のようにやつれ果てていて、それが自分の作業の遅れのしわ寄せかと思うと、いたたまれないような気持ちになったりもした。

今回は、第2稿を掲載することにしました。というか、1稿は書きかけの状態で破棄されていて、どうしてそうなったのか理由はわからないのですが、提出しないままボツになり、2稿にとりかかったようです。1稿は『過ぎ越しの祭り・融和・さよならを言うために』というタイトルでした。



圓空母家
街中心より、住宅地は
感じ。

ドアのあるくぼんだ空間、柱が必要だったら
足してください。
2階建てで、2階部分は、出てこないと思いますが
屋根とかは普通には、
祭の日なので、帯の飾りあります。



細い道の角にあります。平屋で、
右手が坂道になっていて、奥は
2階、というか、地下があるような家です。

圓スミカ家。

■上は察母の家、下はスミカの家の設定画。スミカの家はかわいらしくて
ちょっと気に入っている。

○登場人物
 ラッカ
 ネム
 レキ
 ヒカリ
 カナ
 (カウ)
 証師
 オールドホームの子供達
 ショータ
 ハナ
 寮母(セリフなし)
 ヒヨコ
 ミドリ
 スミカ
 バン屋の店長
 時計屋の親方
 カフェのマスター
 古書屋店員
 スミカ

●オールドホーム

朝、南棟。ふかふかの霜雪が積もった中庭。カナとネム、雪切り棒の先に金属の板がついているような物です。で玄関先のつららを落とされている。子供たちが珍しそうに集まっている。

カナ「つかあ、ここのうでつかいづらを見たら、絶対近寄らない事！すばあさんかレキが、年長組の誰かを呼ぶよ！」
 子供たち「はい(はらはらな感じで)」

●レキの部屋の前

ラッカ、少し気後れしつつ、ドアをノックする。返事は無い。
 ラッカ「レキ……まだ寝てるの？」

「開、扉を落さずラッカ、立ち去ろうと思つた瞬間、不意にがちゃとドアを開けてレキが出てくる。絵の具で汚れたツナギ、袖に後ろでまとめた髪。ラッカを見て微笑む。疲れたような笑顔。」

●廊下

ラッカとレキ、並んで歩いている。レキの表情をうかがうラッカ。レキ、軽く生あくびをし、汚れた手で目をこする。
 ラッカ「……顔色悪いよ」
 レキ「……あんまり寝てないから、でも体調はいいよ、集中して作業して」

どこかうつらな明るさのレキ、ラッカ、心配顔。レキ、ポケットを握る。あれ、という顔。ラッカ、それに気づいてポケットからライターを出し、レキに差し出す。
 ラッカ「そうだ、これ、テーブルに置かれてたよ」
 レキ「……ふっ、と肩の力を抜いて、ラッカにあげる」
 ラッカ「えっ？」

レキ「煙草、やめる事にした。もう、必要ないから……」
 すすすたと歩いてゆくレキ、ライターを握りしめたまま、立ち尽くしてしまふラッカ。

●ゲストルーム

エプロン姿のヒカリ、朝食の支度をしている。ストロブの脇でテーブルに額を載せて背中をめているネムと、隣で上着の雪をはいているカナ。がちゃとドアの開く音。ヒカリ、明るい声で。
 ヒカリ「おっはよ……なにあに？その格好」
 レキとラッカ、入ってくる。レキ、自分の給の具だらけのツナギを見て

ヒカリ「ん、じゃないわよ、すぐに着替えて、手も洗って、もう、レキ「はいはい」といいつつ、テーブルのポケットから汚れた手でラスク(ひとくちサイズなら何でもいのですが)をちよっとつまもつとる。
 ネム「コラ」
 テーブルに額を載せて寝ていたように見えたネム、ちゃんと起きていて、片目を開けて微笑み、レキを見上げて

レキ「おえ」
 ヒカリ「つまみ食いしない！」
 レキ「やれやれ、ヒカリがしゃかりしてきたおかげで私の出る幕がないよ」
 ヒカリ「レキが最近だらしのないよ」
 レキ、小言を言うヒカリから退散するように洗面所に姿を消す。
 カナ「レキいい！ちよと遊んでやってよ、ばあさんが街に帰ってる間だけでいいよ」
 レキ「……洗面所からの不明瞭な声」
 ネム「さて、やっとならねえ」

ネム、立ち上がり、キツンへ。一見いつも通りに見える朝食の風景。ラッカはそんな背のやり取りをぼんやりと眺めながら考える。
 ラッカ(モノローグ)「……そっか、今までは、ラッカのオールドホームの中心はレキだった。でも今は違う。レキの心はここにはない……私が来た時、ゲストルームはレキがみんなをもてなすためにくりあげた部屋だった。今は、この部屋はみんなの部屋だ。みんながレキを元気づけるために作り出した部屋だ。……みんな分かっているんだ。この冬が、レキと通じず最後の日になる事を……」

●オーピング・サブタイトル

●ゲストルーム(食事分だけ時間経過)

ゲストルーム、食後のお茶の時間。窓の外、ぼんやりとした曇り空。
 カナ「う、うちの部屋のストーフ直るまで、ここ泊まる」
 ヒカリ「電気の通ってない北棟なんかに住むからよ」
 ネム「……今日、鈴の実の市が立つ日じゃない？」
 ヒカリ「レキ、さっか、もうそんな時期なんだね」
 ラッカ「すずのみ……って？」
 ヒカリ「過ぎ越しのお祭りに必要な、早く行かなくていい実がなくなっちゃうよ」
 レキ「(俯いて) 私は……」
 ヒカリ「？」

●オーピング・サブタイトル

●ゲストルーム(食事分だけ時間経過)

ラッカ、レキの表情から、レキが寝ると言い出すのだと悟り、その前にレキの髪を取り、明るい声で。
 ラッカ「行(こ)ま、レキ、こもりつきは良くないよ。子供(こ)ちも連れて来」
 レキ、ラッカの期待する顔に押されて笑顔になり
 レキ「そっか……そっかだね」

●オーピング・サブタイトル

●大通り市場

南棟の前ですらと並んだ雪だるま、年長組の五人を横にしたものと、子供たちの分、カナらしき雪だるまに角が生えていて、むくとするカナ。くすくす笑うヒカリ。一筆大きなレキの雪だるま、マフラーが巻かれていたりして、ちよと手が込んでいる。レキの髪を見つ、南棟から子供たちがわらわらと駆け出してくる。
 ショータ「レキ！」
 うれしそうなおショータ、ハナ、レキの手をにらがるようにしがみつくと、レキ、ちよと戸惑うが、うれしそう。

●オーピング・サブタイトル

●大通り市場

大目に狭く大通りの市場、鈴の実の市が開かれている。色も形もさまざまな鈴の実が売られている。基本的には、殻の薄いホオノキのような木の実。色は赤も青も黄も多々、ときどき緑があった物、黄味がかった物、白っぽい物などがある。形は、寺院で聞いた鳴子に近いが、中にはヒヨタンのような形の物もある。実だけが単体で売られているものもあり、リボンのような布を輪にしてへたに糸で括つているものもある。寺院の鳴子のように手にかけるためのものです。師走のように寒だしく、浮き立った雰囲気、街の人たちも繰り出して、市はにぎわっている。
 ラッカ「これは？」
 ネム「土に混ぜ物をする色が変わるんだ」
 ラッカ「これは？」
 ラッカ、落花生のようなくびれた実を手取る。
 ネム「それは実が若い時に真ん中をちよとこくおくの」
 ラッカ「へえ、おもしろい」
 カナ「そっか、ううのはちよと向けるんだね」
 ヒカリ「いいじゃない、(ラッカに向かって) 殻が厚くて、振ると

懐い音がするのがい美なのよ。
ラッカ、手近にあった赤い実を振ってみる。中にがある
らしく、か、か、と音が鳴る。どうと訪ねるよ
つにカキをふるラッカ、と音が鳴る。どうと訪ねるよ

ヒカリ「それは有りかどうの美、お世話になつた人におけるの」
ヒカリ「それそれ自分の実を探しながら人込みに
紛れて離れてゆく。ラッカは立ち止まらな、目を閉
じ、からこを鈴の美の音色に聴き入る。
レキ「美しきよな」

目を閉じしラッカ、すぐ隣にしゃがんでいるレキ。ラッ
カを真似て、耳元で鈴の音を聴いている。レキはもうい
くつか鈴の美を買ったらしく、手に袋を下げてい
る。レキ「美しきよな」
ラッカ「これは、感謝の気持ちを表すものなの？」
レキ「……色によつて違うん、感謝とか好意を伝へたり、お
詫言とか、とにか、身近な人へこれをお贈って、年の心の区
切りをつらるん」

さざ波のような雑踏の中、身を屈して路面に並べられた
鈴の実を眺めるレキと、傍らに佇むラッカ。顔を見合わ
せるでもなく、言葉を交わすまでもない、さざやかな
間。そして突然、それを壊すような音なり。
ミドリ「なんでもアツクはいつも団体行動がとれないよ」
ヒッコ「うせえな、付いてくんなよ」
ダイ「くんよ」
ミドリ「のっ」

慌てて立ち上がるレキ、人込みを押し分けるようにして、
ヒッコが胸を出す。出し抜けてレキと顔を突き合わせる
形になり、猛然と立ち、完全に固まっている。そ
のが股の脚の下をくぐって、ダイが顔を出す。ヒッコ
のように、帽子を脱いでつけていて、立ち上がると、
すれた帽子を慌てて手で。自分用の小さなスエーターホ
ドを持って、レキの選したマフラーもつけている。

ダイ「レキを見てはつと笑顔になる。
レキ「ヒッコ達の前なので、ちょっと言葉が硬い、よう、じゃな
いな」
レキ、ダイの帽子をつまみあげようとするが、ダイは両
手でそれをフロックする。レキ、ため息をついてヒッコ
に向き直る。
ヒッコ「ダイに愛な言葉教えないで」
ミドリ「アツクを思い出して」

通行人を押し分けずかすかあられたミドリ、レキ
を見え振り上げていた傘をおろす。はらはらと行方を見
守るラッカ。
ミドリ「レキに向か……」 なにに、
レキ「別に」
ミドリ「言いた事があつたら、はつきり言たらいじやない、
あまで喧嘩のミドリ、レキはその発音には驚きす、
軽く息を吐き、淡々と言葉を返す。
レキ「……私一人の問題のために、廃工場の人みんな迷惑をか
けて、悪かったと思つて、私は……ミドリ達にとっては、
ただの余所者に過ぎないんだか」

レキ、手に持っていた袋の中から、白い実を取り出して、
ミドリに差し出す。ミドリ、ぼとり手のひらに落とさ
れ、白い鈴の実を見て驚き、そしてレキを真似す。
ミドリ「……レキ」
ヒッコ「俺は別に迷惑とか余所者とか、思つてないぜ」
ミドリ「水溜りだつて、レキのせいだ」
ヒッコ「違つて、俺が自分でやった事だ」
ミドリ「……」

言葉に結まるミドリ、ダイ、睨みあふ三人の間を割つて
入る。
ダイ「ケンカすんなよ、ケンカすんのは頭わるい証だなんだぜ。
……な、レキ」
ダイ、得意げにふんぞりかえり、すぐ後ろに立つている

レキを見上げる。レキ、氣勢をそがれ、素情を和らげ、
ダイの顔を帽子の上からぼんと撫でる。ミドリとヒッ
コを見て
レキ「だつた」
ミドリ、空鳴り散らさずと吸い込んだ息を、溜息にして
吐き出す。表情から感情の色がすつと失われる。普段感
情が表に現れやすいため、静かに怒るほうが逆に深部に
見える。
ミドリ「……勝手にして、私、もう知らないから」
レキ「……」

レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」

レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」

レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」

レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」

レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」

レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」

レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」

レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」

レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」

レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」

ラッカ「そんな……レキは、ここには来られないって……」
ヒッコ「あそなたよ、分かって俺はそこには行けぬさ……」
ラッカ「分かってます、でも……でも、レキには、もう時間
がないから……」
ヒッコ「ラッカの言葉の意味がわからず、怪訝な表情
何気なくポケットに突っ込んでいた手が、レキのくれた
鈴の美に触れ、それを取り出し、手のひらの上で転がす。
からからと乾いた音、それをぼんやり眺めるヒッコの目
がすつと焦点を結ぶ。
ヒッコ「……」

ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」

ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」

ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」

ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」

ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」

ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」

ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」

ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」

ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」

ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」
ヒッコ「……」
レキ「……」

●壁の中

防護服のラッカ。一話に出てきた、光箱の大量に付着した札の前立つラッカ。

ラッカ「この札、まわりのより新しく、今も光箱を生み続けているみたい……」

ラッカ「私の周囲の光箱の元になるのだしたら……」

ラッカ「この札は、札に書かれた文字を凝視する。手の指を折り、書かれた文字の形を真似るラッカ。」

ラッカ「これは、誰に文字を渡したのだら……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「あなたは何……?あなたならレキを助けられたはず。」

ラッカ「どうして……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

レキ「早くキッチン開けてくれないと、お菓子の在庫が出来ないよ。」

レキ「(のれの向)から分かってますよ。後に横ラッカ、珍しく噴いた空、扉は身を切るほど冷たい。」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

●街中

カナ「最初の鐘が鳴りだしたら静かになるよ。過ぎる時は静かに。」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

●街中

カナ「お菓子、言葉じゃ説明できないもの。」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

ラッカ「……」

カナ、時計首を指さし、ラッカ達に手を振り、駆けてゆく。ラッカ、ネム、ヒカリも手を振り別れる。

●時計台

鳴り続ける鐘、機械室の、階段の手すりに懸掛けてパイプを吹かしている親方、何気なく身じろぎする時針の音、前掛けの紐に、いつの間にか鈴の実が結ばれている。振り返ると誰もいない。階下を覗くと足音を忍ばせて降りてゆくカナの後ろ姿。くっつと階上を振り返り、いたずらっぽく笑う。

●パン屋

パン屋の親父とおかみさんに赤い鈴の実を渡すヒカリ、お返しに、やはり赤い鈴の実と、袋いっぱいパンを吹かすの音、さらけのないカニ歩きで近寄ってくる若い店員、ヒカリに、にこりに笑って店員にも鈴の実を渡す。ちよっと頷くさうに呟く店員。

●スミカの家

スミカの家の前、ネムとラッカ、窓から中を覗く。ネム、こんこんと窓をノックする。しばらくして、スミカが顔を出す。赤ん坊を抱きかかえては、スミカ、驚く。ラッカ、スミカと鈴の実の交換。スミカ、もつた鈴の実を赤ん坊に持たせる。紅蓮のような小さな手、それを握り、ゆする赤ん坊、カガカフのうしろ首が鳴る。のでき、きと響き、顔を見合わせ、笑い合う3人。

●オールドホーム

突然、赤ん坊が鈴の実を口に持っていくさうになり、大慌てするスミカ。

●古着屋

寒そうに両手をこすり合わせ、店頭を並べられた小物を慌てて片づけている古着屋。ふ、と横を見るとラッカが立っていて、赤い鈴の実を出して、「『俺に?』』という仕草で、自分を指さす古着屋。ラッカ、ちよっと片足を前に出し、ブーツを見せる。古着屋、右手でラッカの鈴の実を握って、自分の左手の鈴の実をラッカの右手に掲げる。古着屋の足が、ちよっと震っている。ラッカのブーツを指し、小物の値札に使っている黒板に、チャコで「似合ってますよ」と書き、にっこりと笑って小物を入れた箱を両手に持って店内に消える。

●カフェ

込み合っているカフェ。マスター「ごらっしゃい。ご注文は?」と習慣的に口にしながら顔を上げると、ラッカが立っている。差し出された赤い鈴の実をにっこり笑って受けると、キャッシャーの上から吊るされている鈴の受けと、ちよっと取って、ラッカに渡す。ラッカ、それを右手に掲げて、駆けて去り、戸口でくると振り返り、大きく「へい」と挨拶を交わす。いなかの仕草に、店員がにっこり笑う。

それを、どこか赦しそうな目で見送るマスター。

●広場

時計塔の鐘の音が変わる。こぼれ落ちるかきあげ中。カフェの前の通りを広場に歩いていくラッカ、足を止める。広場の方向から響く足音で駆けてくるミドリを見つめる。ミドリ、ラッカを見つめずかすかす歩み寄る。祭の情緒もへたなれどもない様子で、ミドリ「レキは?」

●オールドホームへ続く道

ミドリ「レキに会うなさい、レキは?」
ラッカ「レキは……オールドホームに居る……」
ミドリ「天を仰ぎ、ちよっと手のひらで目を覆う。ミドリ「みっかんいわけだ。(ラッカを覗き、なんで来ないのよ)」
ラッカ「それは……」
ミドリ「いかにアツクも来なさい。(時計台を覗き、あと26分でレキに会えなさい、大変な事になるのよ)」

●オールドホームへ続く道

ずんずん道を行くミドリと、必死に後を追うラッカ。雷はほほほと鳴っている。
ラッカ「(息を切らせて)たい、へんな、こと、って?」
ミドリ「知らない、男子達がなにかたたくてるの、そつだ、一応、これ」
ラッカ「これ、お友達、になりませう、だつて?」
ミドリ「(照れてふくらむ頬)まあね、なんか、アツたいヤツみたいだから」
ラッカ「じゃあ……私も」
ラッカも、左手の鈴の束から鈴の鈴の実を探し、渡す。

●オールドホーム

走り出すミドリ、へへとになって後を追うラッカ。
ラッカ「色の意味、分からないから、語買つて、よかつた」
ミドリ「ふうん、じゃ、白いの意味も知らないんだ」
ラッカ「白い笑って、あの時、レキが……」
ミドリ「白い笑は、普通はお詫言ひの気持ちを表すんだけど、街を出る事にして人が使った時は、さよならの意味になるのよ」
ラッカ「え……」
ミドリ「薄々分かってはいたんだけど……レキには時間が無いんでしょ?悪いけど、時間も時間がないの、走るわよ」
ラッカ「……」

●オールドホーム

走り出すミドリ、へへとになって後を追うラッカ。
アイチを抜けて駆けてゆく二人、中庭に出る。
ラッカ「オールドホームの明かりが消えるから……自分の部屋だ、ミドリ「レキは?」
ラッカ「3階……でもどうするの?」
ミドリ「ドアを覗き込んでみるわよ」
ラッカ「そんなダメ!」
ミドリ「ふい、と息を吐き、いんたは?」
ミドリ「ずんずんと西様の壁に歩み寄り、雨どいを思いやり蹴飛ばす。(こわあんとする)こいつと音が振動が、上へと伝わる。ミドリ「レキ……わざわざ会いに来てやったのに顔も見せないの、も……」
ミドリ「大音量で響き渡った後、刃は再び静寂にまよる。レキの部屋で、レキが顔を出す。ミドリ「レキ……」

レキ「レキ、ミドリ、ラッカ、共に、隣工場地帯の角を見、隣工場のあとと組まれる辺りに、ぼつと閃光が走る。一泊おいてほしゅつ、ひゆるる、という電線、空一面に黄色い火花がわつと広がる。そしてどんつ、という音(距離の分、音が遅れるという、エコーです)。呆然ととれるレキとラッカ、ミドリ、呆れ顔で、ミドリ「あれが返事だつて?」
ラッカ、左手の鈴の束から、黄色い鈴の実を見つけて、ラッカ「黄色い実ってどんな意味?」
ミドリ「聞くまでもないで?」
ラッカ「(思案顔)」
レキ「サンダル履きで、玄関から出てくる。レキ「あれはね、私はバカですって意味だよ、やれやれ、呆れてもいいよ」
ミドリ「返事があるなら承るわよ」
レキ「返事はもどしてあるよ」
ミドリ「(ポケットから白い鈴の実を探り出し、そつか……)レキ「(レキに向き直り)もう、会えないの?」
レキ「どうだろう、分かんないの?」
ミドリ、レキに向かって、弱々しく鈴の鈴の実を出し、ミドリ「受け取って……くれる?」
レキ「……もちろん」
ミドリ、差し出されたレキの右手に鈴の束を握り、そのまま倒れ込むようにレキしがみつき、子供のよう泣き止む。
ラッカ、雷を立てないように、静かにあずさる。

●オールドホーム、正門アイチ前

そつとアイチを抜けるラッカ、ちよつとカナ、ネム、ヒカリと大きなケーキの箱(隣工場からもらったもの)を抱えたタイが歩いてくる。ヒカリ「ラッカ、早く来たね、見たか、あれ」
カナ「それよりコレ見て、じゃん」
カナ、両手にワインの瓶を持って見せびらかす。ラッカ「レキは?」
ネム「なあに?」
カナ「アイチの向こうを除くとするネム達をこめるラッカ、ラッカ「もう少しここに居て」
ラッカ「いいから」
鐘の音が止む。
カナ「……鐘が止んだ、年が変わる……祭も終わりかあ」
ラッカ「……何が起きるの?」
ヒカリ「(ふふつと笑い)……街の壁が、この一年受け止めてきた街の人たちの想いを、空に運ぶの」
ラッカ「耳を澄ませて」
一同、静かに耳を澄ませ、静寂、そして不意に、街中の壁から、圓かな水音と子供の嬉しくなような声が沸き起り始める。それは強くなり、弱くなりながら、まるで子供たちが列をなして嬉し、笑い合っているかのように響いていく。街全体を、ささやかなような幸福な笑い声で包み、ラッカ「……」
すべての音が、ふわりと空に舞い、天空へと消える。一同、寺院での挨拶のように、両手を軽く前に出し、手につけられた鈴の束を軽く揺する。街中から、鈴の束の揺れる気持のいい音が響き、それも空に吸い込まれると、月明かりに照らされた夕陽の街に、本音の静寂が訪れた。

●ゲストルーム

カナ、雪だらけで、びよんびよんと片足で飛び跳ねながら入ってくる。後ろにネムが続く。
 カナ「うう、耳ん、中に、雪が……」
 エプロン姿のヒカリ、朝食の支度をしている。床に雪をまき散らしながら入ってきたカナを咎めるように
 ヒカリ「ちよっとお、ちゃんと雪はたいてから入ってきてよね」
 カナ「凍えちゃうよ。(ばさばさと戸口で雪を払い) ネム、ストーブひとりじめすんなよな」
 ネム、我関せずといった風に、ストーブの脇に座り
 ネム「ムニヤ」
 ヒカリ「もう、床が水浸しになっちゃうじゃない」
 カナ「アタシの心配はしないのか!」
 ラッカとレキ、入ってくる。
 ラッカ「おはよう……。(カナを見て) どうしたの?」
 カナ「チビ共と雪合戦」
 ラッカ、笑う。レキ、そんなやり取りを横目で見ながら、テーブルのラスク(ひとくちサイズなら何でもいいのですが)をちよっとつまもうとする。
 ネム「コラ」

●廃工場正門

廃工場への道行くラッカと、スケートボードをちよっと蛇行させたりしながら戻ってゆくダイ。正門は片方開いている。ダイ、勝手知ったる我家といった風に
 ダイ「たっだいまー」
 ヒヨコ「あーっ!」
 続きの二棟の向こう、中庭からヒヨコの奇声がある。シャベルを担いだヒヨコが大股にすかずかと歩いてくる。
 ヒヨコ「やっとな帰って来やがった! テメエがはぐれるからこっちはバツ当番だぜ!」
 ヒヨコ、手荒くダイにシャベルを投げつける。
 ダイ「わっ!」
 ヒヨコ「バイク乗り場の雪かきな!」
 ダイ「えーっ」
 ヒヨコ「うっせ! やれ!」
 ぶつぶついいながら去っていくダイ。ヒヨコ、門の陰から顔だけ出してこっちを窺っているラッカに気づく。
 ヒヨコ「あー。(親指で背後を差し) アレ、連れてきてくれたんだ。わりい」
 ちよっと手を上げて、立ち去ろうとするヒヨコ。ラッカ、慌てて
 ラッカ「あつ、は、話があつて……。レキの事で」
 ヒヨコ、足を止め、一瞬真顔になる。

▲初稿は途中からアイデアメモのような状態になってしまっていて、書き切っていないのだが、全体に2稿と比較しても、多くのシーンがより長いバージョンになっている。いくつか抜粋。

▲これは、最初の、朝のゲストルームのシーン。カナは子供達と雪合戦をしていた。染しげなシーンで入れたかったが、本筋ではないのでカットしたのだと思う。

▲これは廃工場でラッカとヒヨコが対話するシーンの冒頭部分。会話が長いので、2稿では要点だけに絞っている。しかし、それでも入り切らず、このシーン自体がカットになり、さらにこのシーンの前の、祭りでのレキとヒヨコ、ミドリが出会うシーンも短くなっていく。結果的に、ダイの出番がなくなってしまった。
 か?

●崖の道、吊り橋の前

吊り橋の前。ミドリ、寺院から街へ向かう方向に橋を渡ろうとしているが、怖
いらしく、一步踏み出しては、その足に体重をかけられず……を繰り返して
ラッカ「あの……」

ミドリ「ひゃああああ」

素っ頓狂な声を上げて吊り橋の柱にしがみつくミドリ。振り返り

ミドリ「あーっ！またアンタ！なんで人の行く先々ついてくんのよ！！」

ラッカ「……ここで働いてるんです」

●吊り橋

吊り橋を渡る二人。右手と右足が一緒に出るほどこちこちになって歩くミドリ
と、どうしていいやら分からず後に続くラッカ。

ミドリ「ヒョコに聞いた。なんか、おせっかい、してるみたいじゃ、ないの（
硬いしゃべり方）」

ラッカ「……ごめんなさい」

ミドリ「おかげで、こんな、とこまで、来るハメに、なったじゃない……」

橋を渡りきり、ほっとするミドリ。

ラッカ「……どうして寺院に？」

ミドリ「手紙を届けに。しゃべれないって不便よね」

ラッカ「なんの手紙？」

ミドリ「なんでもいいでしょ。それよりレキの話、本当？」

▲これは、2稿には該当するシーンがない。ミドリは花火を上げる許可を取りに来てい
た、というような話だったと思うが、もう記憶がはっきりしない。ミドリの性格描写を
したかったのと、ラッカともう少し親しくなる場面が描きたかった。

ここから先は、メモ書きだけになっていた。この話数だけ途中でやめて2稿という形
で書き直したのが何故かは分からない。やはり、長すぎたと思って書き直したのだろう

灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第13話 レキの世界・祈り・終章

第6稿 (2002.11.01)

○登場人物

ラツカ

レキ

ネム

ヒカリ

カナ

話師

オールドホームの灰羽の子供達（セリフなし）

ヒヨコ

ミドリ

レキ（14歳）

ヒヨコ（12歳）

ミドリ（11歳）

ネム（14歳）

廃工場の灰羽、数名（セリフなし）

自警団員（セリフなし）

● グリの街

深夜。グリの街全景。街の家々の明かりが、ひとつ、またひとつと消えてゆく。

● オールドホーム

深夜。ゲストルームには明かりがつき、明るい笑い声が漏れている。やがて声が止み、明かりが消える。

● ゲストルーム

パーティのあと。食べ散らかされた料理。廃工場の灰羽達からもらったケーキ。空になったワインの瓶。飾り布。日本のクリスマスのような派手な飾り付けはないが、素朴な暖かさは感じられる。

ラッカ、カナ、ヒカリ、ネム、そしてダイを含めた子供たちが、ベッドに雑魚寝したり、床に毛布を敷いたり、椅子を並べてベッド代わりにしたりして、思い思いに眠っている。ドアの前。静かに室内を見回すレキ。レキの光輪にはほとんど光がなく、かすかに明滅している。

レキ「……………さよなら」

● オープニング・サブタイトル

ベッドの端で目を閉じていたラッカ。かすかなドアの音に反応してゆっくりと目を開き、身を起こす。

ラッカ「(囁き声)レキ」

レキはいない。ラッカ、はつきりと目を覚まし、皆を起こさぬよう、そっとベッドを降りる。

● ゲストルーム前の廊下

静かにドアを閉め、辺りを見回す。レキはいない。意を

▲ そういえば、タバコと酒が出てきましたが、クレームはありませんでした。よかったです。ファンタジーだからでしょうか。

▲ 確か誰かに、このシーンの料理の中にクリスマスのようなチキンがあったよと言われて、あ、それはチエックしそねた、と思った記憶があるのだが、今見返すとそんなものはない。勘違いか、別なシーンだったか……。まあ、卵も食べてますしね。

決して階段を駆け登ってゆくラッカ。

●レキの部屋の前

足早に廊下を歩いてくるラッカ。レキの部屋の前で立ち止まる。ドア、僅かに開いている。中は暗い。

●レキの部屋

雨戸も閉められ、真つ暗な部屋。ラッカ、部屋の明かりをつけようとするが、ドア周辺にはスイッチが見当たらない。はっと気づき、ポケットからレキのライターをとり出し、オレンジ色の小さな炎で部屋を照らす。暗くて細部までは見えないが、きれいに整頓されている。あれほど散らかっていたカンバスや画材や本も無くなっている。かわりに部屋の隅に段ボールが積み上げられている。窓際に布をかぶせられたイーゼル。人の気配はない。寝室の扉は開いている。こちらも無人。そして生活感が感じられないほど、整えられている。

ラッカ「(吹き)レキ……………」

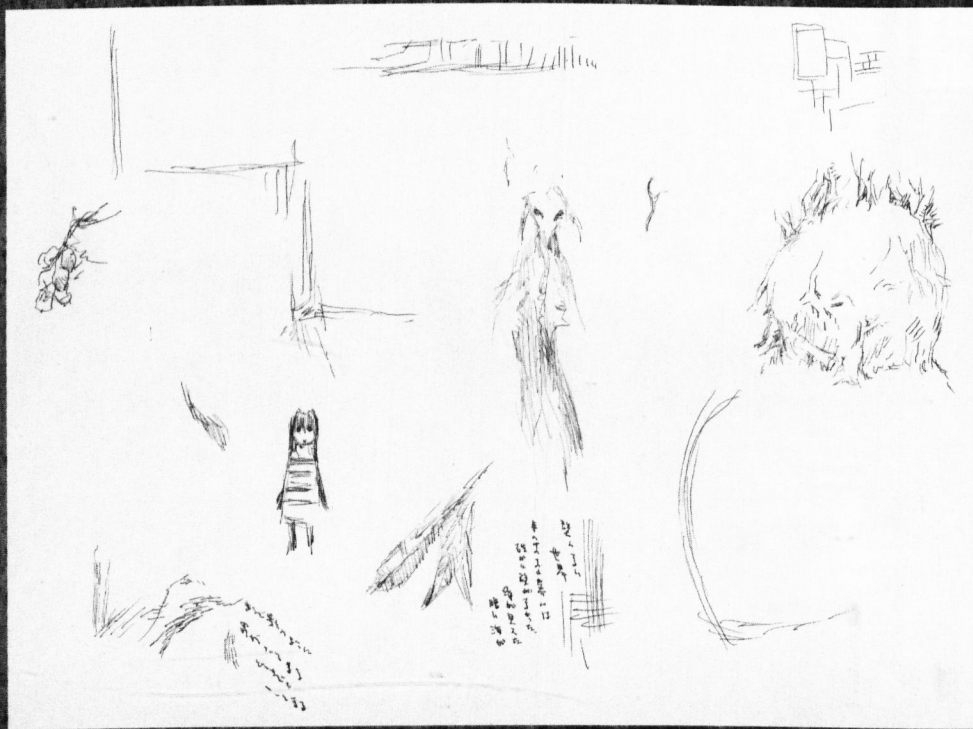
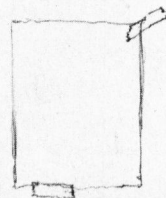
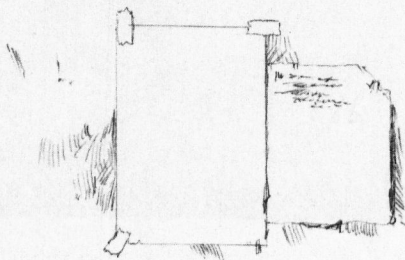
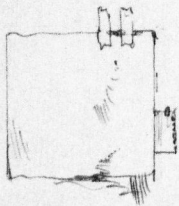
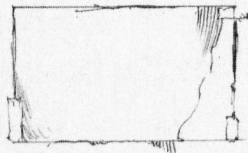
振り返るラッカ。入り口ドアの脇のドアに気づく。こちらは閉まっている。恐る恐る近づき、ノブをひねる。鍵はかかっている。きい、きい、とかすかに軋る音を立ててドアが開く。ライターの炎が揺らめく。

ラッカ「……！」

室内を覗き、驚きと恐怖に息を呑むラッカ。室内には家具はなく、床と四方の壁には、びっしりと絵の具が塗りこめられ、芝居の舞台のように、部屋全体が一枚の絵になっている。濃い灰色の空。黒い地平、黒い森、黒い海。そしてどろりとした赤い月。床は一面の砂利と、まっすぐに延びた線路。部屋の至る所に、空になった絵の具の缶が転がっている。壁の絵は直に描かれた部分もあるが、大きな紙やカンバスを打ち付け、その上からさらに絵の具を塗りこめたような部分もある。部屋の中ほどに立つ

▲壁の絵は僕が描いた。もっと大きな筆で塗ったような荒いタッチがいいかとも思ったが、CGでは難しいのと、細かく、執念深く描いた感じにしたくて細かく描いた。これをそのまま室内にテクスチャとして張ってしまうと、キャラクターとのバランスや、空間の感じが無くなってしまうので、コントラストを落としたり、色調を整えたりして調整している。かなりデリケートで大変な作業だったのではないかと思う。

壁の上の方は塗り切れていないということで、上の方に描きかけの剃毛あとを張り込みたいという事で、それは絵の具で描いて提出した。



■ 壁の絵の素材。上は絵の
上に紙を貼ってさらにそれ
を塗りこめるようにして絵
を描いている。学生時代に
似た様な事をしたことが
ある。下は絵の中うっす
字はもう少しあったのだ
が、レキ自身が上から塗り
ねて判別できないように
意図で書いた物は除外し
た。



■上が北面の壁、下が東面の壁の
絵。

■美術系の予備校で絵の勉強をしていた頃、鉛筆のデッサンで、ハッチングの代わりに画面に鉛筆で大量に文字を書き、ぐしゃぐしゃに書き重ねられた文字の集合体が遠くから見ると石膏デッサンになっている、というような絵を突然描き始めてしまい、周囲の学生や講師の先生方から『やばい』『病んでいる』といった意見をたくさんいただいた。僕としては、自分の手の動かし方に一定の癖があり、それが画面に嫌な味を出していると思ったので、それを消すために、画面に大量の文字を書く事で、強制的に画面に不規則なノイズを入れて癖を飛ばしていたのだが、あまり理解されなかった。大学の入試の時のデッサンも、『どんぼのめがね』の歌詞とかがぐしゃぐしゃに入っている。

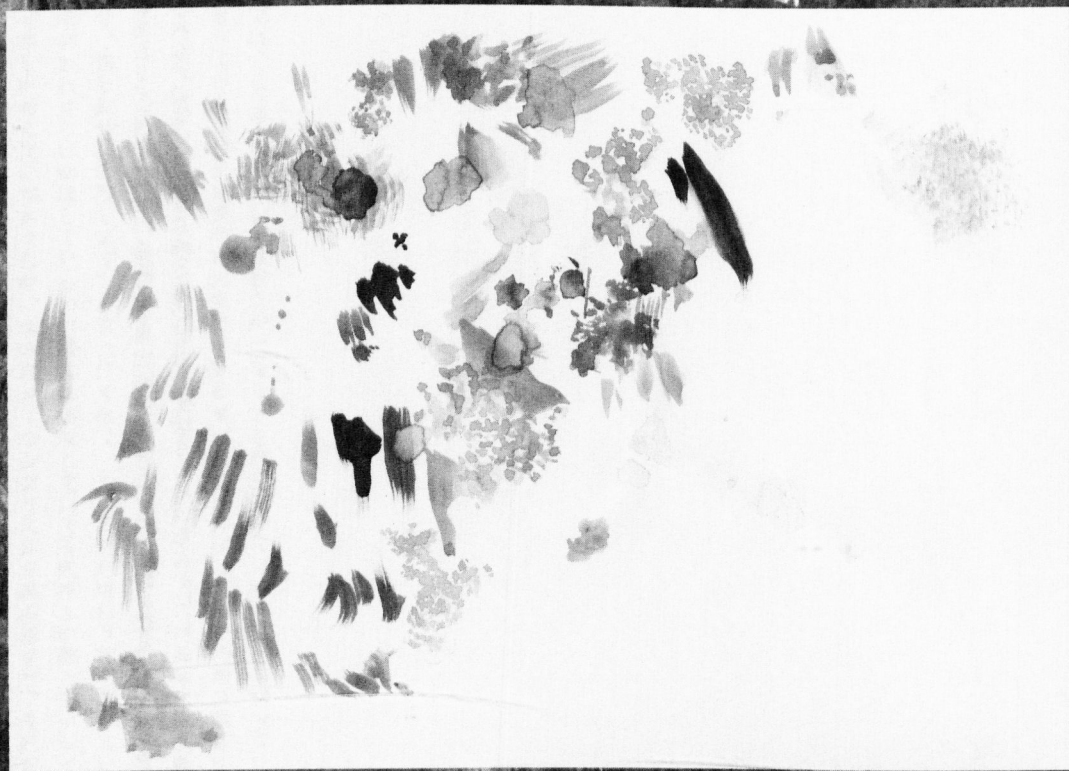
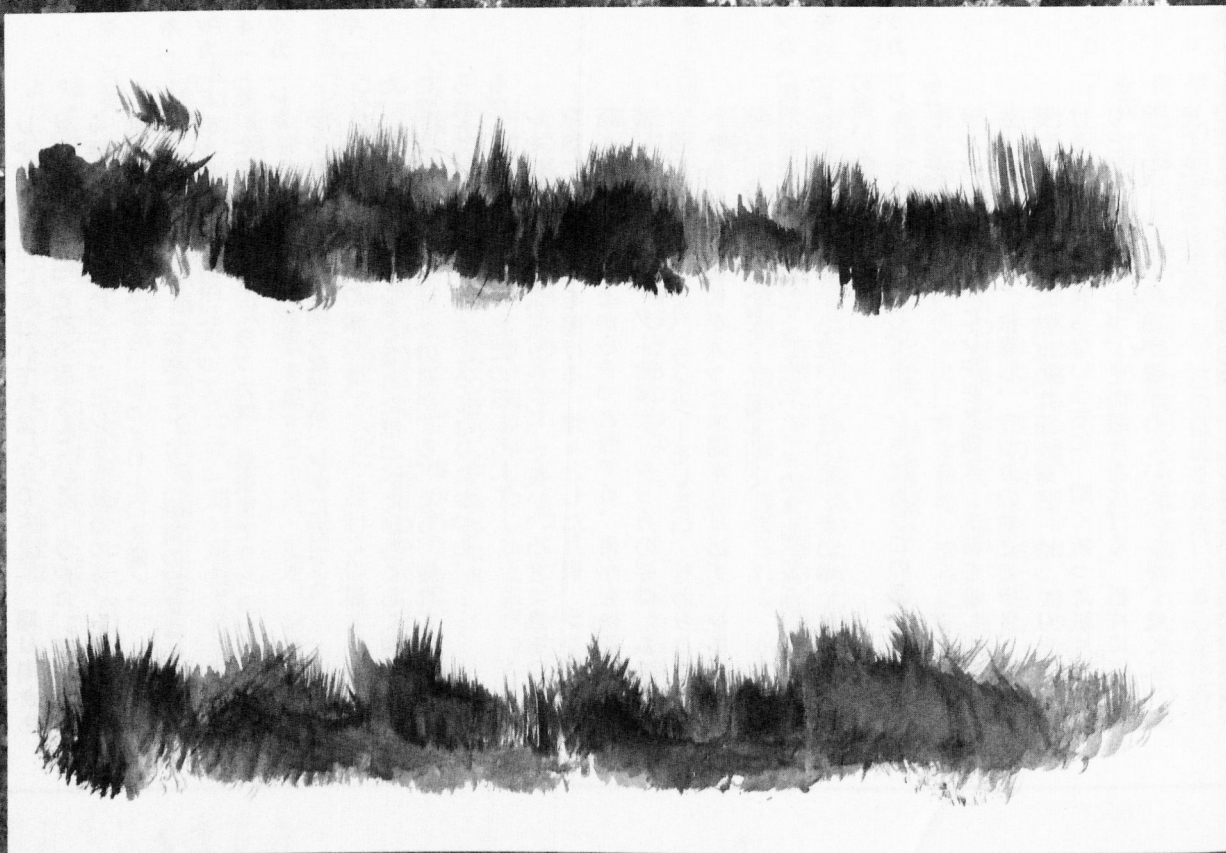
レキが絵の中に文字を埋め込んでいるのは、そのあたりの自分の記憶が元になっています。





■ 上が南面の壁、下が西面の壁の絵。次ページが床面。全部ある程度整合性をもって繋がるように描いている。結構面倒だった。でも繋げてみたらちょっと変な部分が出てしまい、修正してもらわなければならなかった。





■上が、壁の上部の塗り切れていないぶぶんの刷毛あとの素材。下は絵の中に入れてたテクスチャ。

レキ。ラッカに気づいていないかのように、振り向きもせず、ただじっと立ち尽くしている。ラッカ、声を掛ける事ができず、ただじっとレキを見つめる。レキ、やや前方の足元を見ながら、ゆっくりと口を開く。

レキ「……………ラッカ。……………何故ここに？（感情の起伏なく）」
ラッカ「こめんない。勝手に入って……………」

レキ「（乾いた笑い）……………ラッカは、最後までラッカだね」
ラッカ「レキ……………これは？」

ラッカ、辺りを見回しながら、レキに近づく。
レキ「……………これが私の夢の……………私はこの道を歩いて

た。風が冷たくて、涙で濡れたほっぺたがちくちく痛んだのを憶えてる。遠くで何かの音がする。でも、疲れて何も考えられない。私は、この石ころになりたかった。……………痛みも悲しみも感じない、ただの石ころに」

レキ、諦めと自嘲の入り交じった笑い。小さく息をつき、窓際に行き、窓を開ける。煌々とした月夜。ラッカ、木箱をポケットの上からそっと撫でる。何かを決意した表情。ラッカ、ライターを消す。ラッカの姿は、ふっと淡い闇に沈む。ラッカ、ライターをしまい、代わりにポケットからレキの名札が入った木箱をとり出す。レキ、振り返り、それを見てぎくりと身を引く。

ラッカ「灰羽連盟から預かってきたの。レキの本当の名前」

レキ「（目を伏せ）……………知らない。きっと、その中には……………何の救いもない」

ラッカ「レキ……………。だとしても、レキはもうこの悪い夢を終わらせなきゃ駄目なの……………」

ラッカ、まっすぐにレキを見据え、木箱を差し出す。レキ、一瞬迷うが、決意し、ラッカの前まで歩き、木箱を受け取る。木箱に結ばれた紐を解き、ゆっくりと蓋を開ける。蓋を開けきらないうちに、細く折った紙片がするりと顔を出す。レキ、その紙片を広げる。紙片には、筆書きで、レキの物語が書かれている。レキ、呟くようにそれを読み始める。

朗読（レキの呟きから次第に話師の声へ）『レキという名の少女の、

▲このあたりから、基本的には大きな場面転換もなく、ただ対話が続く。それでも緊張感が途切れないのは、ひたすら絵と声の芝居が素晴らしかったおかげ。

物語を語ろう。その者は悲運に見舞われ、悲しみを分け合うはずの相手すらを失った。己の価値を見失い、自らを小石に例えて礫と呼んだ。だがその真の名は轢き裂かれたる者の意を表（あらわ）して礫という』

ラッカ「……れき……？」

カラン、と木箱が床に落ちる音。ラッカ、はっと我に返る。元のレキのアトリエ。目の前に呆然と佇むレキがいる。その目は、何の感情も映していない。木箱はその足元に落ちていく。ラッカ、身を屈め、傍らに転がった札を手に取る。『礫』の文字。眼を見開き

ラッカ「……そんな」

ラッカ、レキを見上げる。レキは彫像のように動かない。だが、その表情が、苦悶にゆっくりと歪む。鍵のように指を曲げた両の掌が、静かに頬に当てられる。かすかな悲鳴。

レキ「ああ……」

それは、声とも叫びともつかない。レキ、膝から崩れ落ち、うなだれる。

ラッカ「レ……」

その名を呼ぶ事がためらわれ、口をつぐむラッカ。闇の中でも、レキの羽に黒い斑紋がじわじわと広がってゆくのが分かる。レキ、線路の絵の上に手をつき

レキ「轢き裂かれたる者……そうだ。轢かれたんだ。これは道

じゃない。何かを運ぶ鉄の轍だ。（部屋の中央に立ち）私はここで……自分を捨てたんだ」

ラッカ「レキ、私は……」

レキを救おうと、言葉を探すラッカ、だが、レキはそれを遮り、話し続ける。

レキ「私はね、ラッカ。……ずっと、良い灰羽であり続けたい。いつかこの罪悪感から逃れられると思ってた」

レキ、自嘲気味に笑う。

レキ「お笑い草だ。私にとって、この街は牢獄だったんだ。壁が意味するのは、死だ。（ラッカの衝撃を受けた顔）ここは死によって隔てられているんだ。そしてこの部屋は……」

▲初稿では、ここでもまだレキはどこかに優しさを残していて、本心を出し切っていない感じになっていた。リメイクが出たあと、助監督の大森さんに「レキの内面は徹底的に書きさらないと、仮にうまくまとまってもあとに残るものがなくなって作品的には失敗になってしまう。この話数だけは、最終話まで通して見てこなかった人はおいてきぼりにしていいです。僕と監督が許可します」と言ってくれて、それで肝が据わった。書いていた時は、現場がどれくらい切迫しているか、頭では理解していても気持ち回っていかなくて、ただ書く事しか考えていなかったが、当時のメーリングリストを読み返すと、それだけで冷や汗が出るくらい切迫しているのが分かる。

レキ、両手を広げる。レキは静かな絶望に押し潰されてゆく。

レキ「……この部屋は、繭だ。この暗い夢から、私はとうとう抜け出す事ができなかった。ありもしない救いを求めて、7年間も、ずっと……」

●『回想』ゲストルーム（5年前、以下『回想終わり』まで同じ）

テーブルには、伝承関係の本数冊と茶器。傍らに立つネム。狼狽した顔。レキ、テーブルのカップを腕でなぎ払う。

レキ「クラモリがいなくなったのが、いい事はずなんでしょう!!」
カップが跳ね飛び、割れる。ネム、驚愕の表情。

●工場地区と街を繋ぐ橋

街。土砂降りの街。橋の上、失意のレキ。不意に背後から口笛。

ヒヨコ「羽、黒いんだ。かっこいい」

振り返るレキ。12歳のヒヨコと、そのうしろにちよつと隠れるようにして傘を持った11歳のミドリ。

●廃工場

昼。ガレージ。バイクの部品が散在している。レキ、ミドリが持った大きな鏡に自分を映す。黄色く塗られた羽。レキの隣には、黄色のペンキ缶と刷毛を持っているヒヨコ。オレンジの渦巻模様の描かれた羽を見せて笑う。
ヒヨコ「ホラ、生まれつきの羽根の色なんて、これで関係ねーだろ」

●街

昼。大通り、やや勾配のある下り坂を、レキの乗ったスクーターがふらふらと危なっかしく走り抜けてゆく。後

▲回想シーンは、これでも限界まで削ったのだが、それでも入り切らず、より詰めた感じになっている。

ろに達乗りしたヒヨコ、泡食っている。驚いて飛び退く
 通行人。けたけた笑いながら並走する、廃工場の仲間達
 の箱乗りしたハーレー。レキの笑顔。風を切る黄色い羽。

●寺院

中庭の四阿（あずまや）の前。向き合って座っているレ
 キと話師。

話師「巢立った灰羽が街に戻る事はない」

レキ「じゃあ……クラモリみたいに、私も誰かに優しくしたら……」

……私にも巢立ちの日は来る？」

話師「……そうだ。そしてそれが謎掛けの答えにもなるだろう」

●廃工場。女子棟。

夕方。廃工場最上階。壁の向こうを目で追うレキ。

レキ「クラモリ……いつか、絶対会いに行くから————」

少し離れた物陰からそれを見るミドリとヒヨコ。ヒヨコ、

何かを決意した真剣な目。

●廃工場。深夜

真つ暗な廃工場。門の前。巻いたロープを肩から提げた

ヒヨコ、後部席にレキを乗せ、スクーターで走り出す。

女子棟から、こけつまろびつしながらミドリが駆けてく

る。泣いている。レキ、振り返り、すこし後ろめたそう

な顔。

●壁の前

東の壁、基底部。ヒヨコの手が、コの字の鉄の楔を壁に

押し当てる。ハンマーが打ち降ろされた瞬間、暗転。

●闇

▲このあたりも、同人誌で少しフォロワーした。

▲シナリオの段階では、楔はコの字型の木子キヌの針のような物を考えていた。本編では
 ロープを通すような感じのものになっている。変更後の方がかっこよかったので変えても
 らって良かった。

■ 廃工場時代のレキ。オールドホームにいた頃と、年代的にはそんなに代わっていないが、服装や表情など、少し違っている。

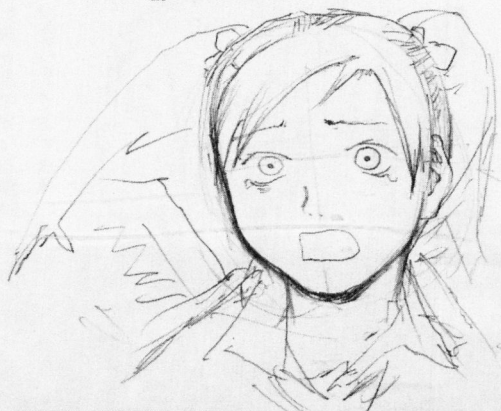


レキの
オールドホーム
レキの
レキの
レキの





外出着。襟なしブルゾン。



■ミドリ11歳

13話ら出てきます。

耳当ては外出時。

ウサギのぬいぐるみは
なんかワルワル面
がいいです。



■ ヒョコ12歳 2002.10.23

現在のダイよりは大人です。
バイク乗ったりするし。

■ ミドリとヒョコ、子供時代の設定。ミドリは人相の悪いウサギのぬいぐるみをいつも持っている。ヒョコは見たまんま。

間。話師の声が響く。深いエコー。

話師「クラモリはお前を信じて巣立っていった。その信頼に対する、これがお前の答えか（怒鳴らない。だが冷たく、厳しく）」

●寺院、四阿（あずまや）前

数人の自警団員、レキを連れてドアから出ていくところ。

レキ、背後の話師に駆け寄ろうとするが、自警団員に腕を掴まれていて動けない。腕を振りほどこうともがき、叫ぶ。

レキ「嘘つき！助けてくれるって言ったじゃない！」

溢れた涙が散る。暗転。

●自警団・留置所

簡素な木製のベッドと、小さな小窓、洗面所の扉があるだけの石の部屋。ベッドに腰を下ろしているレキ。真っ黒に変色した羽。背を丸め、握り合わされた手が、自然に祈りの形をつくる。

レキ「神様……………。もしいるなら、ヒヨコを助けて。いい灰羽になるから。もう絶対に、間違ったりしないから……………」

●廃工場地区と街を繋ぐ橋の前

カシツ、という乾いた音。

レキ「！！」

石を投げつけられ、顔を押さえて身を折るレキ。地面に転がる石。呆然とした顔のレキ。橋の街側に立ち尽くす。橋の中ほどに、石を持ったミドリが、ヒステリックな表情で仁王立ちしている。背後には、腕組みして立っている灰羽が数名。冷淡な視線。

ミドリ「出ていけ！あんたなんか仲間じゃない！（気丈さが悲しみに負けて、傲然とした態度が突然崩れる）……………ヒヨコが



▲レキとミドリの立ち位置を、橋の街側と中ほど、と書いてしまったが、そんなに離れたら石が届かない。レキの立ち位置は端の中央から見て街側の方という意味。ちょっと説明が言葉足らずだった。まあ、意味は通じたからいいのですが。

■子供時代のヒヨコとミドリ、表情。

死んじゃったら、あなたのせいだから！」

レキ「……………」

右臉の上を押さえて、立ち尽くすレキ。押さえた手と臉の間から、細く血が一筋伝う。まるで涙のように。

●レキのアトリエ『回想終わり』

レキ「……………」誰かを信じるたびに、必ず裏切られた。だから、いつか信じるのをやめた。裏切られても傷つかないで済むように、私はただの石ころになった。……………」皮肉なもんだね。心を閉ざして、親切に振る舞えば、みんな私を良い灰羽だと言う。……………」私の心の中は、こんなにも昏く汚れているのに」

ラッカの目の前で、信じていたものが、少しずつ崩れてゆく。その事に脅え、それでもレキを信じようと勇気を振り絞るラッカ。

ラッカ「(震えて)嘘だよ……………」レキはいつだって優しくかった。……………」私、信じてる」

レキ「(自己嫌悪と憐愍の交じり合った表情)ラッカ……………」。ラッカは気づかなかつたんだね。……………」私が、どれだけラッカの事を嫉んでいたか」

ラッカ「(衝撃を受け)……………」嘘」

レキ「同じ罪憑きなのにラッカだけが癒された。みんな私を置いていってしまう。……………」クウが巣立った時だって、私は心のどこかでクウを嫉み、そんな自分を心底軽蔑していた……………」

ラッカ、レキの言葉を聞き続ける事ができない。握った拳で耳を塞ぎ、叫ぶ。

ラッカ「……………」嘘だ！レキは井戸に落ちた私を探しに来てくれた！ずっと看病して、薬を採ってきてくれて……………」！苦しい時、レキはいつだって傍にいてくれた！」

レキ「そうだよ！どうしてだと思っ？」

ラッカ、身を固くし、その答えを聞きたくないと言うように首をすくめる。だがレキの言葉は止まらない。

レキ「私はただ、救いが欲しかったんだ。誰かの役に立っている時だけは、私は自分の罪を忘れる事ができた。そして、いつか

神様が来て、赦しを与えてくれるんじゃないかって……そればかり考えていた」

ラッカ「やめて……やめて……」

レキ「(間。一度息をつき)ラッカ……。 (抑揚のない声) 私に」とって、ラッカはラッカでなくてもよかったんだ……」

ラッカ「(絶叫) やめてえー！」

レキ「ラッカの顔を見つけた時、私は賭けをしたんだ。この灰羽が私を信じてくれたら、私は赦されるって、無理やり自分に言い聞かせた。だから私は優しく振る舞った。爾から生まれたのが誰かなんて関係なかった」

ラッカ、叫ぼうとするが、混乱して声にならない。数歩あとずさる。

レキ「全部……嘘だったんだ。(自暴自棄の叫び) 私は自分が救われればそれで良かった！ラッカが私を信じたのは間違いだっただ……分かったら出ていって……」

(叫び) 出ていけ！！

まるでその言葉に突き飛ばされたかのように、ラッカは背後の壁に叩きつけられる。震えが止まらない。すぐ傍には、入り口のドアがある。ラッカがぶつかつたはずみで、ドアはわずかに開く。外から差し込むかな光が、床に細い筋をつくる。あと半歩下がれば、この昏いレキの世界から抜け出す事ができる。だが、レキには二度と会えないだろう。逡巡するラッカ。堪えていた涙が、とうとう溢れ、ラッカは背後のドアノブに手をかけ――

●レキのアトリエ

ドアに背を向け、固く目を閉じ、立ち尽くしているレキ。背後でキィ……と軋るような音。そしてドアは静かに閉じられる。静寂。ゆっくり目を開き

レキ「はじめから……赦されるわけなかった」

●アトリエの外。ドアの前。

▲初稿では、ラッカはただレキの強い言葉に気圧されて部屋を出てしまい、だが自分を鼓舞して戻ってくる、という流れだった。ラッカの気持ちの切り替わりに大きなきっかけはなく、展開が弱いという指摘があり、リテイクとなった。

これを書いた時は、正直なところ『もうこれしかない』という気持ちだったので、指摘を受けて読み返すと、確かにラッカが再びレキの部屋に戻るだけの心の強さを得るきっかけとなるのが必要で、それが思いつかず、相当悩みました。結局6稿が決定稿となったのですが、初稿から5稿まで、それぞれが3〜6回くらい改稿した未提出の原稿があり、脚本の13話のフォルダを開けてみたら、決定稿を含めて36個のちよつとずつバージョンの違いが3話が入っていた。

メーリングリストでは、個々の改稿について、監督、助監督、プロデューサーにチェックしてもらっているが、全員の時点では地獄のような忙しさだったはずで、にも関わらず、妥協せずに改稿を手伝っていた。全員の納得いくまで、よく付きあってもらえたなあと思う。僕一人ではとてもここまで完成度を上げる事はできなかった。

決定稿が出るまで、果てしなく時間がかかった印象があるのだが、初稿の提出が10月26日、決定稿が11月1日なので、1週間足らずの出来事だった。

しかも、10月27日に120GのRAIDドライブがまるまるクラッシュしてデータを全損している。原因は、動作のどろいバックアップツールが半日ドライブを回しっぱなしにしたせいなので、バックアップが良かったんだか悪かったんだか……これ以降、二度とストライピングのRAIDは組まないと思った。灰羽関係はバックアップ済みだったので不幸中の幸い。

閉じたドアの前で泣きじゃくるラッカ。力尽き、しゃがみ込み、うわ言のように
ラッカ「嘘だ……嘘だ……」

●レキのアトリエ

そっと目を開くレキ。目の前に、半透明の、少女時代のレキが立っている。レキを見上げる少女。少女を見下ろすレキ。遠くで、ほう……と列車の汽笛が聞こえる。ほんの幽かな列車の音と地響き。

レキ「……あの音がここまで来たら、私は消えるんだね？」

少女「(少女、静かに頷き)……ラッカはレキを助けに来たのに」

レキ「私には、救われる資格なんてない」

少女、その言葉に傷つき、顔を歪める。恨むような目でレキを見つ……、不意に、少女の胸の辺りに羽の斑紋に似た黒い染みが浮かび、じわっと広がっていく。

少女「私は……たすけて言う事もできないの？」

レキ、怒りと怯えが縋(な)い交ぜになり、恐慌をきたす。

レキ「やめる！」

少女「(うつろに)誰かを信じるのが……そんなに怖い？」

少女、かくんと膝をつく。斑紋は広がり、見えない炎に炙(あぶ)られるように、完全に黒変した部分からくすぐずと崩れてゆく。レキ、両の拳を握りしめ、それが幻だと言ったかのように、固く目を閉じ、顔を逸らす。

レキ「裏切られるのもう嫌なんだ！夢の中でも、この街でも、どれだけ願っても一度も救いは訪れなかったじゃないか！」

少女「(顔が半分なくなつたような状態で)だつて……レキは一度もたすけて言わなかったもの……。ずっと……待ってただけ」

レキ「(半狂乱になり)怖かったんだ。もし心から助けを求めて、誰も返事をしてくれなかったら？本当に独りぼっちだとした

▲最初は、黒い染みではなく、赤黒い血のような表現を考えていた。血になってしまうと、生々しい分、逆に安っぽいという意見があり、変更した。

少女「……………」

返事がない。はっとして、目を開く。少女の体は既に半分近く消失している。レキ、くずおれる少女に駆け寄りその体を抱きとめようとすが、少女はレキの手の中でグズグズに崩れ、消える。レキ、両手を呆然と見続ける。再び汽笛の音。少し近づいている。のろろと振り返るレキ。背後の壁に、黒い染みが現れる。それは、遠方より近づく列車の黒い影のようにも、黒いタールのような物が壁から染み出しているようにも見える。かすかな地響き。レキの顔に恐怖の色と、同時に諦念が浮かぶ。

●アトリエの外。

ラッカ、悲嘆に暮れ、目を閉じ

ラッカ「……………何も知らなければ良かった。知らなければレキの事、好きでいられた……………」

キイ、という音。はっと目を開くラッカ。風のせい、窓がすかすかに開き、わずかな隙間から差し込む月光が、傍らのイーゼルを照らす。イーゼルにかかった布が柔らかく揺れ、半分ずり落ちる。見覚えのあるカンバスがあるのが分かる。ラッカ、誘われるように近づき、落ちかけた布を持ち上げる。静かな微笑みを浮かべたクラモリの肖像。ラッカ、それに話しかけるように

ラッカ「私、レキを信じた……………。だけど、……………」

俯くラッカ。イーゼルとカンバスの間に、小さな薄いクロッキー帳が挟まっているのに気づく。手に取ってみると、鉛筆が挟まっていて、そのページを開くと、黒い羽の絵を鉛筆でぐしゃぐしゃにした絵が描かれている。その下に小さなコメント『クラモリ、ごめんなさい。私は赦されなかった』。ぱらぱらと数ページめくるラッカ。

ラッカ「……………日記？」

子供達と雪だるま、カナと時計塔などの絵がちらちらと見える。自分の記述を見つけ、はっとして手を止めるラッ

11

▲10月の29日に3稿を提出し、メーリングリスト上で検討してもらったが不採用、30日に4稿を上げて、V編が何かでどこかのスタジオに集まって打ち合わせをした。まだどこか弱い、という事で、リメイクになった。スタジオの廊下ですれ違いざまにラディクスのプロデューサーに『あと2日以内にできなければ最終話は純集編に差し換えますから』と言われ、その場で延々と考えて、不意に、レキの日記と、実はレキはラッカに最後の希望を託していたのだ、というシーンが浮かんだ。その瞬間、第二話からのレキのすべての行動がこの瞬間のための伏線であったかのように、完全に繋がった。その場にいた中心スタッフに集まってもらい、緊急に会議をして、頭に浮かんだシーンを話して、急いで帰宅して5稿を書き上げた。書き上げたのが11月1日の午前3時。細部を整えて11時に6稿を出し、それが決定稿になった。

この時の緊張感や、レキの日記のシーンを思いついた時の高揚感は、多分一生忘れないと思う。

力。

○繭の絵

『初めて自分で繭を見つけた！嬉しい！嬉しい！これはきつと特別な事だ。神様が私に遣わしてくれたんだ。うんと優しくしてあげよう。ずっと一緒にいてあげよう。今度こそ私はクラモリみたいに良い灰羽になるんだ』

日記をじつと見続けるラッカ。何かを思い出し、目を見開く。

ラッカ「そうだ……私……繭の中で、レキを……」

●回想。ラッカが孵化した日。ラッカの繭の部屋

物置のような繭の部屋。廊下にコーンを置き終わったレキが入ってくる。ちよつと照れくさそうに、でも嬉しくて仕方がないという風に繭の前に立ち、片手を頭の高さにかけて繭をコンコン、とノックする。

12

●回想。繭の中。

ノックの音。羊水の中で眠っているラッカ、うつすらと目を開ける。半覚醒。深いエコーのかかったレキの音が、母親が体内の子に話しかけるように響く。

レキ「聞こえますか？……私の名前はレキ……」

●回想。繭の前

両手を繭に当て、体を預けているレキ。額を押し当てるようにして、繭の中のラッカに話しかけている（繭内部のラッカのリアクション、適度に入れつつ）。

レキ「繭を見つけたの初めてだから、嬉しくてどきどきしています。……灰羽は、名前や過去をなくしてしまうから、最初は寂しかったり、不安になったりすると思うけど、私がいつも一

▲ほくにとつて、この物語は、レキというキャラクターの心の一番底にあるものを捜し出す旅のようなものだった。このシーンが浮かんだ瞬間、やっと自分はレキというキャラクターを把握できたのだと思つた。

緒にいるから。何があっても私があなたを守るから……………。
だから、私の最後の希望を、あなたに託す事を許して——
——」

●レキの私室

回想終わり。クラモリの絵の前。ラッカ、繭の中で聞いたレキを声がありありと思い出す。レキの心根が嬉しく、同時にこれだけ他者に尽くしながら許しの訪れないレキが憐れで、ラッカはレキの手紙を胸に押し当て泣く。

ラッカ「私は……………最初から……………レキに守られてたんだ……………」

ラッカ、立ち上がり、涙を振り払う。決意の表情。

ラッカ「私、レキを信じる。私が……………レキを救う……………鳥になるんだ——」

ラッカはドアの前まで走り、一瞬クラモリを振り返り——

13

●レキの世界

バン、と開かれるドア。と同時に吹きつけた強い風に驚くラッカ。手で顔を覆う。怯むが、後ずさりはしない。室内は暗く、レキの姿はない。踏み出した足が、ガリツと砂利を踏む。遠い地平が、現実の空間のように感じられる。黒い空。数歩先に線路がある。強い風。背後を振り返ると、ドアも壁も無くなっている。

ラッカ「レキっ！」

力いっぱい叫ぶ。かすかな反響。返事はない。風下から、ぼおっ……………、という汽笛の音。だが、線路の先は暗い森の陰に隠れて、動くものの姿は見えない。風上に目をむけ、赤い月を見上げるラッカ。その下を見ると、遙か先に、線路上に倒れている人影が見える。黒い羽が、時折力なく風にはためく。

ラッカ「レキ！」

駆け寄ろうとするラッカ。だが、不意に体を引かれる。振り向くと、少女の幻影がラッカの左手を掴んでいる。遠くからかすかに列車の走る音と振動が伝わってくる。ラッカ、手をもぎ離そうとするが、びくともしない。

ラッカ「放して」

少女「(押し殺した調子で)…………レキには何も聞こえない」

ラッカ「どうして……………?(はっとして)レキ!レキ!」

遠い線路の先で、レキがゆっくりと身を起す。放心したような後ろ姿。同時に汽笛。近づいている。森の影から、列車の影がぼんやりと浮かび上がる。それを見て、ラッカは駆け出そうとするが、動く事はできない。

少女「レキはここで消える事を選んだ」

ラッカ「違う!レキは私に救いを求めてた!…………レキ!レキ!私を呼んで!私が必要だ!って言って!!」

●レキの世界。線路の上

身を起こし、放心しているレキ。激しい地響き。レールが震える。暗い空の向こうから、さらに暗い、闇を凝縮したような列車の影が、みるみる大きくなってくる。レキ、震える顔を上げる。耳を聳する汽笛。レキ、両手で自分の体を抱くようにして

レキ「……………助けて……………私を助けて……………ラッカ!」

●レキの世界、レキのアトリエ

その瞬間、キン!という硬質な音と共に、ラッカの手を掴んでいた少女の体に縦に亀裂が走り、ひびの入った鏡に映る像のように、二つに裂け、消える。ラッカの手の中から、二つに割れた札が地面に滑り落ちる。

ラッカ「!」

その瞬間、ラッカはアトリエの入り口のドアの前に立っている。目の前のアトリエでは、部屋を圧するほど巨大な黒い列車の影が、壁から滲み出し、実体化しようとし

▲13話は、時間がなかったにも関わらず(僕のシナリオが遅かったせいなので申し訳ないとしか言えないのですが)、全体に作画レベルはとも高かったのですが、特にこのシーンの一連のレキの表情は、本当に魂が入っている感じがして素晴らしい。一番大切なシーンだったので、言葉がなくても表情だけで感情の伝わるような素晴らしい絵が入ってくれて良かった。

ている。弾かれたように駆け出すラッカ。ほぼ同時に、列車の影も、決壊したダムからほとばしる黒い濁流のよ
うにレキの立つ場所へと迫る。

ラッカ「レキ!!」

叫び、駆け込んでくるラッカ。鳥のように馳せ、レキに抱きつき、自分の体ごとレールの向こうへと身を躍らせる。一瞬前までレキの立っていた空間を、列車の影が轟音を立て、部屋を揺るがせながら走りすぎてゆく。レキとラッカがどうなったのか、判別がつかないまま、列車の影が視界のすべてを黒く塗りつぶす。

●レキのアトリエ

レキ「……………う……………」

壁際。レキ、朦朧としながらも身を起こす。頭を振り、周囲を見回すと、少し離れた床に、ラッカがうつ伏せに倒れている。列車の姿はない。力なく手足を投げ出し、微動だにしない。

レキ「(恐る恐る)ラッカ?……………(叫び)ラッカ!」

レキ、ラッカに駆け寄り、抱き起こす。ラッカ、ゆつくりと目を開く。茫洋とした目が焦点を結び、レキの無事な姿を認め、静かに微笑む。

ラッカ「レキ……………よかった」

ラッカの指先が、頬を伝い落ちようとしていたレキの涙を受ける。レキ、その手をとり、自分の頬に押し当てる。

レキ「……………ラッカ、ラッカ。ありがと(語尾、声にならない)——」

不意に、眩しい光が差す。雨戸の隙間から朝日差す。手をかざし、眩しうに眼を細めるレキ。がらんとした部屋は静寂に包まれている。壁際に、並んで座る二人。レキ、ぼつりと呟くように

レキ「私は……………赦されたんだろうか」

足元に、札が落ちていくのに気づく。割れたはずの札が、元通りになっている。

▲列車の影の動きもかっこよかった。

ラッカ「これ……割れたはずなのに」

札を見るレキとラッカ。名前が『礫』に書き変わっている。

ラッカ「名前が……！」
レキ「えっ？」

レキ、名前を見てはつとし、慌てて木箱を探す。木箱の傍らに、話師の手紙が残っている。手紙を開くレキ（その動作から朗読かぶせ始める）。アトリエを閉め、ラッカに鍵を渡すレキ。ラッカ、レキの羽が灰色になっている事に気づき、レキに何か話しかけ、自分の羽を羽ばたかせて見せる。レキ、自分の羽を見て驚き、何度も触れて確かめる。

朗読「……もしも鳥がお前に救いをもたらしたなら、礫という

名は消え、石樽（いしくれ）の礫が真の名となるであろう。

そうなる事を信じ、あらかじめ礫という名の新たな物語をこ

こに記す……」

16

●オールドホーム裏手

向き合うラッカとレキ。

ラッカ「……いつか、また会えるよね」

レキ「（頷き）うん。そう……信じてる」

ラッカ「私も、信じる」

レキ、微笑み

レキ「目を閉じて」

ラッカ「え？」

レキ「巣立ちの日を迎えた灰羽は、ふつと居なくなるシキタリだからね」

ラッカ「（笑って）最後まで……レキはレキだね」

ラッカ、目を閉じる。……さく、さく、と雪を踏む

足音がゆっくりと遠くなる。ラッカ、ゆっくりと目を開

ける。レキはもう居ない。

朗読「……その者は険しき道を選び、弱者を労る事で呪いを

▲最初は、全体的に話師の手紙が長文すぎて、流れを止めてしまっていた。かといって削りすぎては伝わらないので、この形に落ち着くまでにかなり試行錯誤した。

▲このセリフはなんかキスシーンを理想させるかなと思ってどうしようか迷ったけど、結局これが一番良いという結論に落ち着いた。

▲『その者……』で始まるモノローグはどうしてもナウシカを連想させてしまう。ちょうど前の話数の美術が上がってきた時で、壁の中のイメージがちょっとラビュタっぽい、という話が出たあたりだったので、またか！と叫んでしまった。

濯いだ。その心性は救いを得んがための仮初めのものでは
たが、今やその者の本質となった。

「灰羽が巢立つ時、踏み石となる古い階段がある。磔とは
その踏み石であり、弱者の導き手となる者である」

朗読にかぶせて、声なしの情景。ゲストルームの情景。

眠っているヒカリとカナ、子供達。一人ネムだけが静か
に椅子に座り、祈りを捧げている。ふと目を開け、ペラ
ンダに出る。ペランダから見る北西の空は、かすかに明
るい。オールドホーム外観。雪に染まった風の丘。そし
て西の森、西の空。静かに、空に上ってゆく光の柱。

●オールドホーム裏手

裏手入り口に立つラッカ。空を見上げている。すつと傍
らに立つネム。

ネム「……レキは、無事に？」

頷くラッカ。ネム、静かに微笑み

ネム「……よかった」

カナとヒカリがあとから駆けてくる。遥か西の空を見上
げ

カナ「……レキ」

ラッカ「……うん」

ヒカリ「……レキ……。寂しいけど、よかったんだ
よね」

ネム「そう。……祝福があったんだから」

四人、無意識のうちに手を繋ぎ合っている。

●廃工場

2階。鉄骨にもたれて座っているヒヨコ。後ろ姿で、表
情は見えない。リュックは背負っていない。帽子も外し、
雑巾のようにねじり、無造作にポケットに突っ込む。ミ
ドリ、レモンズフレを一切れ載せたケーキ皿を持って、
ヒヨコの背後に立つ。

▲オールドホームの外壁は裏手が崩れていて、そこからそのままに出られるのだが、そ
の設定はもしかしたらここが唯一の登場箇所かもしれない。7話の投稿で、ツミが出てき
たとき、ラッカの混乱や荒廃した気持ちを表すために瓦礫だらけのこの裏手でツミと対話
するシーンを作ったが、それも採用されなかったし、他に裏手に回るシーンは他に思い当
たらない。まあ、これも一瞬ちらっと見えるだけなのですが。

指摘されるまで気づかなかったけど、オールドホームの立地から考えると、ここでペラ
ンダから西の森が見えるかは、まあぎりぎりといったところ。

ミドリ「西の空、すごいよ。見に来ないの？」

ヒヨコ「……………いいよ。返事はもう、もらってんだから」

ヒヨコ、ポケットから白い鈴の身を取り出し、ぽんと放つて、手で受ける。

ミドリ「どうだかね。……………ケーキ食う？」

ヒヨコ「いらね。甘いんだろ、ドーセ」

ミドリ「レモンのスフレだよ。レキの手作り」

ヒヨコ、一瞬びくつと反応するが、振り向かず

ヒヨコ「いらねーってば」

ミドリ、ちよつとムツとして

ミドリ「ほんつと、鈍いやツ。(ヒヨコの光輪に皿をガシヤツと載せ)レモンの実は何色でしょー」

すたすた立ち去るミドリ。ヒヨコ、ケーキ皿を光輪に載

せたまま3秒。

ヒヨコ「……………あー」

●西の空・エピローグ

冬の空を切り開くように、どこまでも伸びる光柱。糸がほどけるように、ゆっくりと消えてゆく。

ラッカ(モノローグ)『その日の夕方、みんなで森に行きました。

みんな、心のどこかで分かっていたみたいで、誰も泣かずに、

笑顔でお別れを言う事ができました。礼拝堂でお祈りして、

オールドホームに戻り、いつもより一人少ない食卓で、夕飯を食べました』

(モノローグにかぶせて)夕闇の風の丘、オールドホーム全景。その向こうに西の森。光柱は消ええている。

●ゲストルーム

ラッカ(モノローグ)『レキは私達に、たくさんの絵を残してくれていました。レキが、自分の暗い夢の絵の他に、こんなに明るく美しい絵も描いていたのだと知って、少しほつとしました。その絵を見ると、本当にレキはこの街が、そしてオー

▲シナリオに入る前の、ごく大きっぱなプロットの状態の時には、このシーンは、光輪の上に皿を置いて、血がくるくる回るといふ、かなりコミカルなものだった。その頃は、最終話がここまで暗く生々しい展開になるとは思っておらず、キャラクターも掘り下げる以前の状態だったので、ラストも、話師がヒヨコのバイクの後ろに乗ってレキを見送りに来たりと、今考えると信じられないような事が書かれていたりする。

ルドホームが好きだったんだなと思いました』

(モノローグにかぶせて) ゲストルーム内。カメラ、ゆっくりと部屋の中をパンしてゆく。ベッドの上や、壁に掛かっていた絵が、真新しい額に入った、グリの街の風景画に変わっている。その部屋で、朝食の支度をしているヒカリ。トースターから勢いよく飛び出したパンに驚く。泥靴で駆け込んできた子供達を叱るカナ。ペランダで、そんな光景を見て、静かに微笑むネム。ふ、と北西の空を見やる。

●北第二棟 (南側)

薄暗い廊下。その廊下に長く延びた、電気のコード。その先に、電気のコードを巻いたリールを、重そうに運んでいるラッカ。リールはゆっくり回り、ラッカの背後にコードを残してゆく。片手でリールを持ち、片手で懐中電灯を持って、前方を照らしている。

ラッカ (モノローグ) 『もうすぐ、冬が終わります。春になったら、

新しい繭が生まれるのでしょうか？ 今度は私が、頼りになる先輩にならなくては、と思います』

ラッカ、はた、と足を止める。何気なく通り過ぎようとした部屋 (ドアは開いていて中は暗くてよく見えなかった) の前までバックして、懐中電灯で部屋を照らす。懐中電灯の光の円が、ふらふらと埃っぽい床の上を行き来し、部屋の中央でびたりと止まる。そこには、発芽したばかりの繭の芽が、一二つ寄り添うように並んでいる。

ラッカ (「(感心) うわあ……………」 双子だあ。(慌てて) 大変!」

ラッカ、ケーブルのリールを持ったまま走り出し、角を曲がろうとしたところで、ピンと張ったケーブルに体を引かれ、体制を崩す。懐中電灯を取り落とす。懐中電灯は床に落ちて、消えてしまう。

ラッカ「わったっ…………た」

何とか持ちこたえ、リールを置き、慌てて懐中電灯を拾い、2、3度振ると、光が戻る。ほっとして、改めて

▲これは、北棟はカナの部屋以外電気が通っていないため、カナの部屋から電気を引いているところ。

北第一棟の一階の蔭棚のあるあたりに、大きな浴場とシャワー設備があって、ラッカとカナはそこに電気を引こうとしていた。

ラッカ「大変、大変！」

ばたばたと、階段を駆け降りてゆく（一連の動作、1話のレキを連想させるように）。

● 繭の芽のある室内

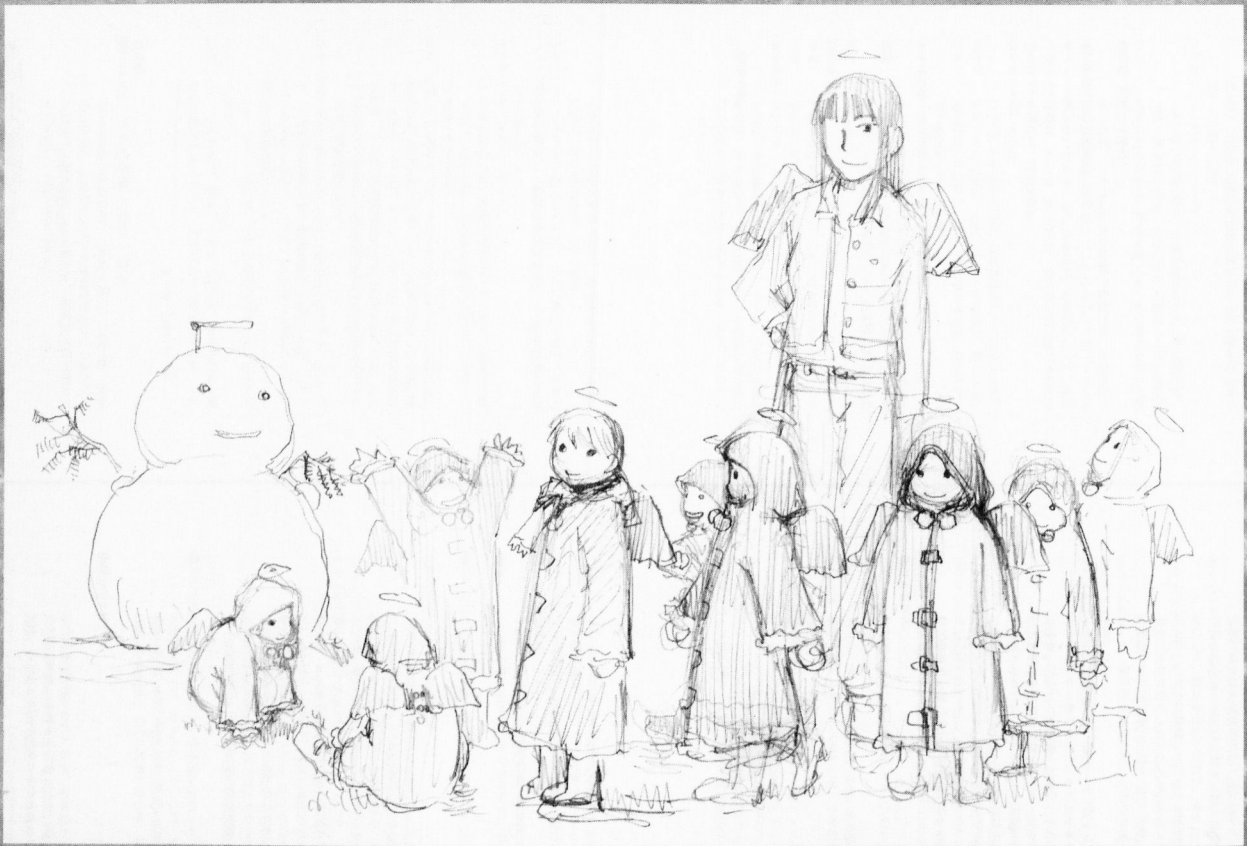
部屋の中の一対の繭の芽、根づいた床のタイルにパキッとヒビを走らせつつ、ぐつと葉を広げる。暗転。

ラッカ（モノローグ）『……………私は、レキの事、忘れない』

了

原稿用紙200字詰め8枚

▲以上です。ありがとうございました。64ページから、初稿を載せておきます。本編で入り切らなかった回想シーンなどを確認する事ができます。



●グリの街

深夜、壁の外が見えないぎりぎりの高さから見下ろす。グリの街並。街の裏の明かりが、ひとつ、またひとつと消えてゆく。

●オールドホーム

深夜、ゲストルームには明かりがつき、明るい笑い声が漏れている。やがて音が止み、明かりが消える。

●ゲストルーム

パーティのあと、食べ残された料理、廃工場の灰羽達からもったケーキ。空になったワインの瓶。日本のクリスマスのような派手な飾り付けはないが、葉っぱなかわかさは感じられる。

●オープニング・サブタイトル

ベッドの端で目を閉じていたラッカ。かすかなドアの音に反応してゆっくりと目を開き、身を起す。

●レキの部屋の前

足音に廊下を歩いてくるラッカ。レキの部屋の扉で立ち止まる。ドア、僅かに開いている。中は暗い。

●レキの部屋

両戸も閉められ、真っ暗な部屋。ラッカ、部屋の明かりをつつようとすが、ドア周辺にはスイッチが見当たらない。はっと気づき、ポケットからレキのライターをとり出す。オレンジ色の小さな炎で部屋を照らす。暗くて細部までは見えないが、きれいに整頓されている。ラッカ、部屋の中央まで歩き、ライターをかざして部屋を見回す。机の上にも鉛筆一本ない。あれはど散らかっていたクロッキー帳やカンプスや画材や本も無くなって、かわりに部屋の隅に段ボールが積み上げられている。

●ラッカ「レキ……」

ラッカ「……」

●ラッカ「……」

ラッカ「……」

●ラッカ「……」

●ラッカ「……」

驚きと恐怖に息を呑むラッカ。室内には家具はなく、床と四方の壁には、びっしりと絵の具が塗りこめられ、芝居の舞台のように、部屋全体が一枚の絵になっている。それは暗い色の絵の具で描かれた風景、濃い灰色の空、黒い地平、黒い海、黒い山、そして赤と白と赤の月。床は一面の砂利と、まっすぐに延びた線路。部屋の至る所に、空になった絵の具の缶が転がっている。壁の絵は直に描かれた部分もあるが、大きな紙やカンパスを打ち付け、その上からさらに絵の具を塗りこめたような部分もある。壁際に立つレキ、ラッカに驚いていないかのように、黙り向きせず、ただじっと立ち尽くしている。ラッカ、声を出せる事ができず、ただじっと手を見つめる。レキ、やや前方の足元を見ながら、ゆっくりと口を開く。

●レキ「……」

レキ「……」

●ラッカ「……」

ラッカ「……」

●レキ「……」

レキ「……」

●ラッカ「……」

ラッカ「……」

●レキ「……」

レキ「……」

●ラッカ「……」

ラッカ「……」

●レキ「……」

レキ「……」

●ラッカ「……」

ラッカ「……」

●レキ「……」

レキ「……」

●ラッカ「……」

ラッカ「……」

「レキの涙から次第に話の声」。「レキ」いう少女の、物語を語る。その者は不可逆な非難に見舞われ、深い失意の中にあつた。悲しみを分け合はずはすの相手すら失ひ、孤独に前まななかり、赤い月下、石橋（いしくれ）の道を歩いた。その者は己の価値を見失ひ、自らを小石に例へて嘆き呼んだ。だがその真の名は破れたる者の表（あらわ）……レキといふ……」

レキ「はつと我を返り、木箱の蓋をもどかして開ける。『探・汝の真の名をここに記す』と書かれた白い薄紙に包まれた札がある。薄紙を開くと、札に書かれている文字は『……』」

レキ「はつと我を返り、木箱の蓋をもどかして開ける。『探・汝の真の名をここに記す』と書かれた白い薄紙に包まれた札がある。薄紙を開くと、札に書かれている文字は『……』」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

レキ「あゝ……」

●グスタルム(5年前、以下同じ)

●寺院

●寺院

●寺院内部

寺院、内部の小部屋、縦に長い小窓、連置員の居住する小部屋のうちの、空き部屋と思われる一室。使われていないベッドと粗末な机、その椅子に座り、身を委ねて居るレキ。向かいに立つ話師。仮面の上からも、厳しい表情が感じ取れる。

●話師

「レキ、お前を借して置いた。その借物に対する、これがお前の答えか(怒鳴らない、だが冷たく、厳しく)。返す言葉もなくうたがはれるレキ。小さな声、うろたえるように。」

●レキ

「……」

●話師

「……」

●レキ

「……」

●話師

「……」

●レキ

「……」

●話師

「……」

●レキ

「……」

●話師

「……」

●レキ

「……」

●話師

「……」

●レキ

「……」

●レキ

「私の心の中は、こんなにも狭く汚れているのに、」

●話師

「……」

●レキ

「……」

●話師

「……」

●レキ

「……」

●話師

「……」

●レキ

「……」

●話師

「……」

●レキ

「……」

●話師

「……」

●レキ

「……」

●話師

「……」

●レキ

「……」

●話師

「……」

●レキ

「……」

●レキのアトリエ

立ち尽くすレキ。目の前に、半透明の、少女時代のレキが立っている。レキを見上げる少女。少女を見下ろすレキ。遠くで、ぼんやりと、列車の汽笛が聞こえる。ほんの端かな列車の音と地響き。

●レキ

「……」

●レキ

「……」

●レキ

「……」

●レキ

「……」

●レキ

「……」

●レキ

「……」

●レキ

「……」

●レキ

「……」

●レキ

「……」

●レキ

「……」

●レキ

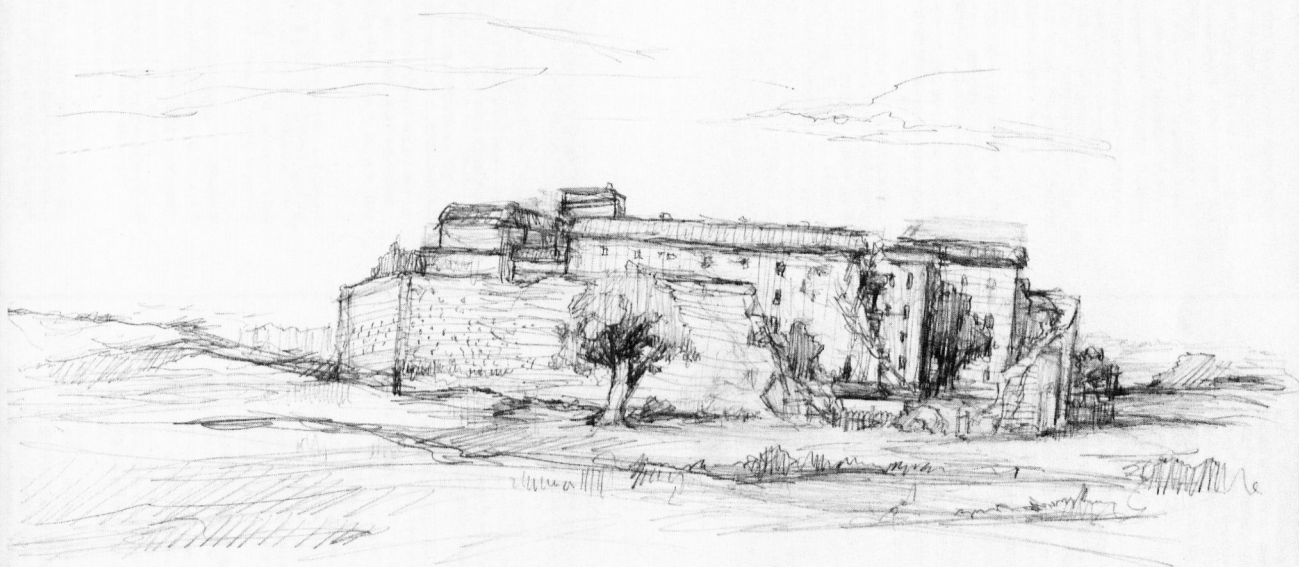
「……」

●レキ

「……」

●レキ

「……」



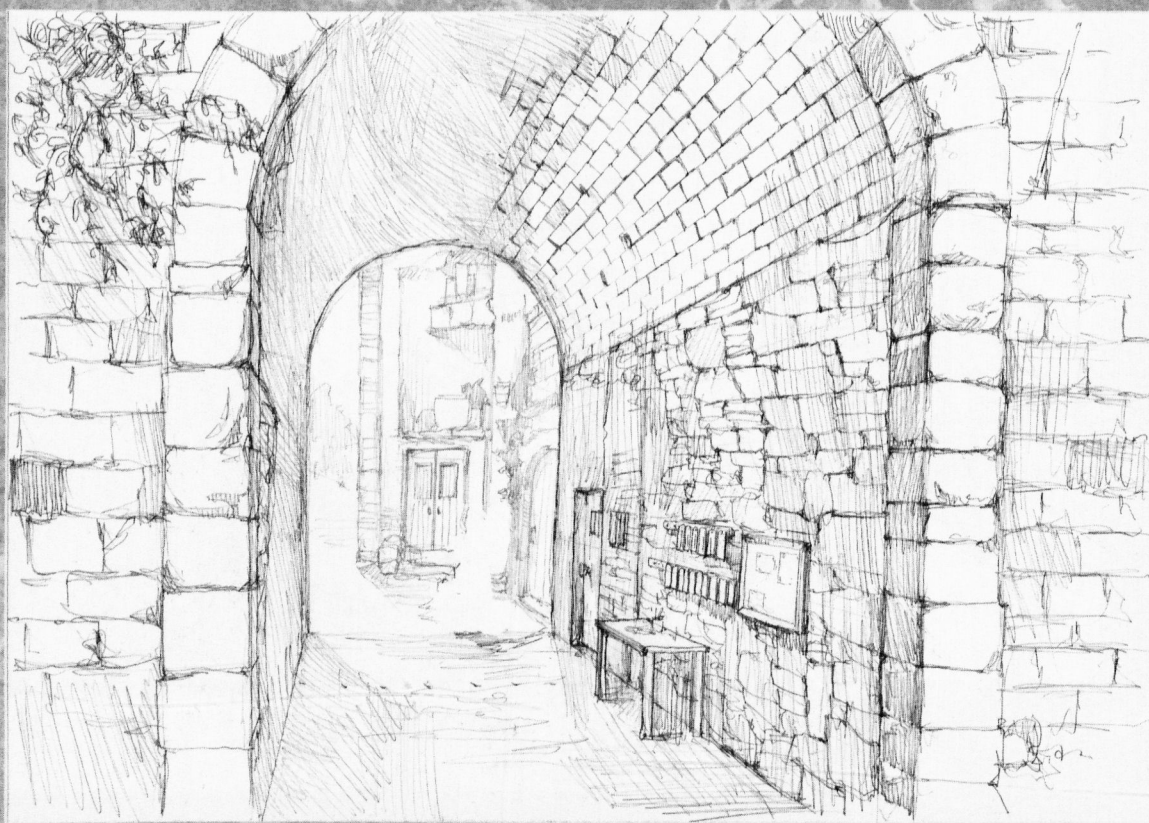
▲初稿は、回想シーンは長めに入っている。当初はこれでもダイジェストのように見せれば時間内に収まると思ったが、結局いくつかのシーンは入らなかつた。すべてのシーンを目まぐるしく見せるより、意味が通る最低限のシーンのある程度間をとって見せた方が効果的と判断して、削除するシーンを決めた。それでも、シーンひとカットしかない回想でどの程度感情移入してもらえるかは最後まで不安要因だった。

⑥稿の解説でも書いたが、初稿ではレキの日記のくだりはなく、今読み返すと、確かに物語として弱い。

一番問題になったのが、神様の定義についてで、ここでのラッカの言葉は固いというか、かえって誤解を招く感じがして、強く反対された。言葉で説明しようとするほど言いたい事から遠ざかってしまう気がして、結局、それは物語をここまで通して観ていけば自然と伝わっているはずの事なので、ここで言葉で説明する事自体をやめた。ラッカは神様がいないと言いたかったのではなく、「自分は神様ではないから人を救すという行為は許されない事なのかもしれないけど、神の身代わりのようなふるまいをする事で、たとえ罰を受ける事になっても自分はレキを救いたかったんだ」という事です。

でもそれは、言葉で説明しなくても、伝わっていなければならない事です。なので、神についての対話は削除しました。

確かに、神様、という単語が出るだけで、なにか押しつけがましい空気が出るので、削って正解でした。







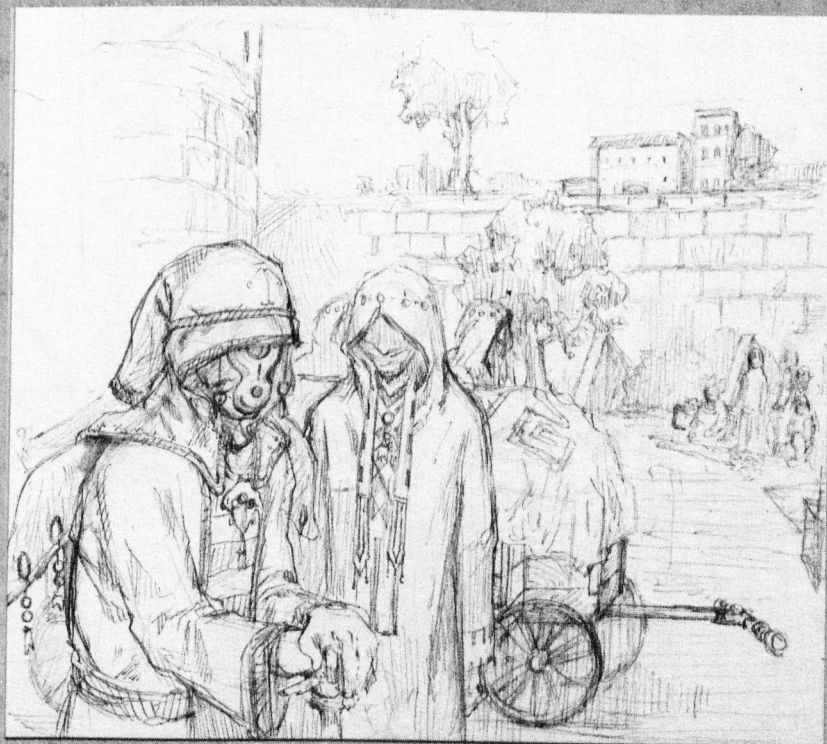
■この4枚は、エピソードに出てきたレキの描いた絵の下絵。オールドホームの正門の絵は、設定画ですが、気に入っていたのでレキの絵として使わせてもらいました。

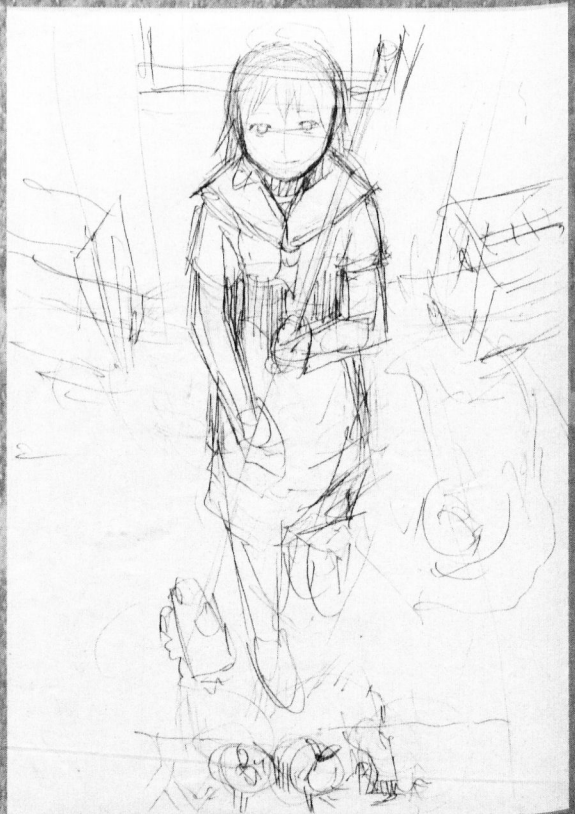




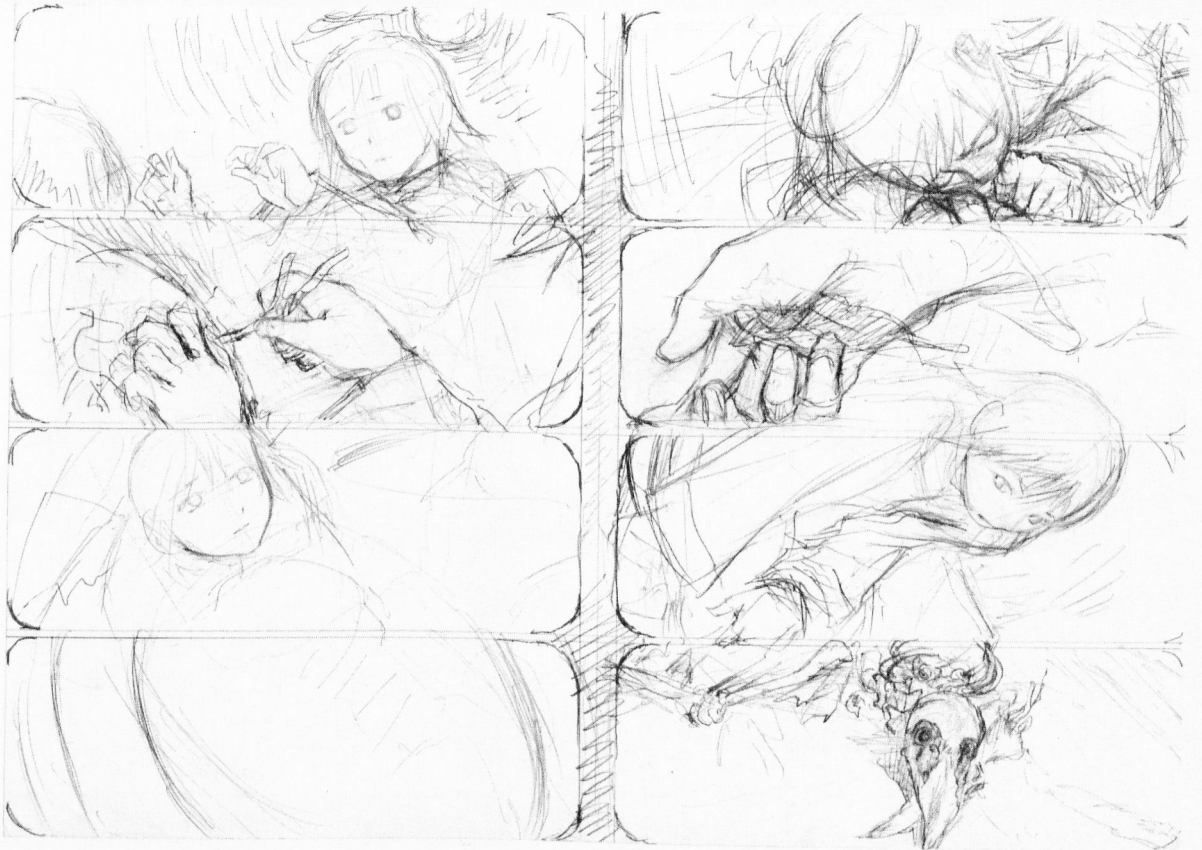


■これは、画集の表紙イラストのボツ案。左図はなかなか気に入っていたのだが、目を閉じているからダメ、というような話になった。





■これは、画集の表紙イラストのボツ案。左図はなかなか気に入っていたのだが、目を閉じているからダメ、というような話になった。





■前ページも画集の描き下ろし分のラフ。このページの上は灰羽せいかつ日誌の表紙ラフ、下はカラーページのラフ。左上は、画集の表紙のラフで、背景と人物の対比を確認していたときのメモ。座っている人間を描く時、微妙に勘が狂う事があるので時々こういう事をします。

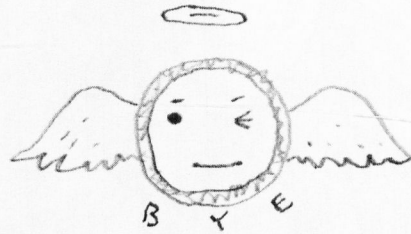


■ ラッカ色々。これはどれも廉価版のDVDボックスのパッケージ案です。同じキャラクターに見えないくらい印象が違いますが、これは、ラフの段階で色々な表情を描いて、なにか印象的な絵になりそうない表情が出たら、それを起点にイメージを起こし、クリナップしながらキャラを合わせてゆく、という手順で制作しているため、久しぶりに描いたら全然似なかった、という事ではありません。……というか、まあそれもあるのですが、久しぶりに描くのだから今までにない表情で描きたいと思い、試行錯誤している状態の絵です。



まずは、こんなにも長い間おつきあいいただき、本当にありがとうございました。これで、灰羽連盟脚本集は完結となります。この作品を作るために僕が制作した素材は、これでほぼすべて出し切ったのではないかと思います。早いもので、灰羽連盟のアニメの制作が完了してから、4年が経とうとしています。この作品はわずか半年たらずで作りあげたものですが、自分の人生の中でも、最も密度の高い半年間だったのではないかと思います。反動で……というわけではないのですが、この数年間、新しい作品を発表する事ができず、申しわけありません。いくつか思うようにならなかった仕事などもあり、いたずらに時間を空費してしまった、という焦りばかりがつのる数年間でしたが、そんな中でもアイデアだけはこつこつとため込んできましたので、いつか発表できるのではないかと思います。次回作を楽しみにしていただけたら幸いです。

2006.12.12 安倍吉俊



奥付

灰羽連盟脚本集第八卷

発行責任者 AB/安倍吉俊

発行元 むてけいロマンス

発行年月日 2006年12月12日

連絡先 abetc@mac.com

無断転用を禁じます

